

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (4)

【お】(後半)

大場清泉 (おおば・せいせん)

生没年不詳。秋田県に生まれる。本名・良治。郷里を中心に活動した日本画家。1921(大正10)年4月、同郷の友人であり東京で活動する後藤忠光が主宰、創刊した版画と誌の雑誌『青美』に木版画を寄せた。また、後藤が関東大震災で帰郷した際に友人7名で第1回秋田美術展覧会を開催。第2回展にも出品した。またその頃の『秋田魁新報』に『満洲スケッチ』や『満洲風俗』などの挿絵をしばしば寄せた。【文献】『町田市立国際版画美術館紀要』3(1999)／『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)(滝沢)

大場千秋 (おおば・ちあき) 1902～1978

1902(明治35)年11月18日、北海道に生まれる。水戸高等学校を経て、1928年東京帝国大学文学部心理学科を卒業。水戸高等学校教諭、茨城大学教授等を歴任。退官後、茨城キリスト教大学の創設に尽力し、初代学長(1971～1975年)を務める。1977年3月に退職。その間、版画との出会いは不明だが、東京の料治熊太主宰の版画誌『白と黒』第26号(1932.7)に『顔』、第27号(1932.8)に『勿来』、第28号(1932.10)に『崖上の路』を発表。また同じ料治主宰の『版藝術』第5号(1932.8)に『水辺』、第20号(1933.11)に『農人形と亀作馬』を発表している。1958年には日本版画院茨城支部を創設、事務局長を務め、会の活動・発展に寄与する。『原始民族の実験心理学』(1948)を始め、文化人類学者としての著書多し。戦前から水戸市千波町御茶園411に在住。1978(昭和53)年11月28日逝去。没後7回忌の記念に『大場千秋版画集』(1984)が刊行される。【文献】大場千秋『新版 文化人類学序説』(明好社 1968)／『大場千秋版画集』(発行所不明 1984)／『創作版画誌の系譜』(加治)

大橋月皎 (おおはし・げっこう)

生没年不詳。日本画家、主に挿絵画家として、大正末から昭和の戦後期まで活動が知られる。『講談倶楽部』、『講談雑誌』などの挿絵から活動を始めたものと推定。印刷画(ポスター、雑誌表紙等)の向上をめざす实用版画美術協会に所属し、上野松阪屋での1929年の展覧会(12.7～12)に出品あり。木版画としては京都版画院から伝統木版で数点の大判版画を出している。美人画、芝居役者絵(歌舞伎絵)、歴史風俗画を得意としている。伊藤晴雨と交友がある。【文献】『伊藤晴雨画伯を偲んで』(『裏窓』(1961.4)(岩切)

大橋孝吉 (おおはし・こうきち) 1898～1984

1898(明治31)年5月27日京都市に生まれる。最初日本画を学び、のち洋画に転じる。日本画の号は「三峽」、のち洋画でも使う。1917年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業し、京都市立絵画専門学校に進学。同年の第11回展に日本画《神苑》が入選している「大橋三峽」は同人か。1920年同校を卒業。上京し、川端画学校で洋画を学ぶ。1924年から1927年まで渡欧。帰国後は京都市に住む。1927年の第6回国画創作協会展の第二部(洋画部)

に滞欧作7点を出品。会友に推薦され、翌1928年の第7回展にも出品し、第二部の会員になっている。同年の国画創作協会解散、それに続く国画会の新発足では創立会員として名を連ね、翌1929年の第4回展から1940年の第15回展まで毎回出品。その間、第4・5・7・8回展には油絵・水彩画のほか、木版画も出品した。作品名は第4回展が『ベトナム神殿』、第5回展(1930)が『エジナ村』、第7回展(1932)が『晩夏』、第8回展(1933)が『温泉』である。一方、1939年の第3回新文展にも招かれ、無鑑査出品。1940年には国画会を退会し、新文展に転じ、翌1941年の第4回展、1943年の第8回展、1944年の戦時特別展にも出品した。また、1935年と1937年から1944年の京都市展の洋画部審査委員を務めているが、1944年の出品時には再び「三峽」の号を使っている。1984(昭和59)年2月25日京都市で逝去。【文献】『美之國』4-6(1928.6)／『原色 浮世絵第百科事典』10(大修館書店 1981)／『国画創作協会の全貌』(光村推古書院 1996)(三木)

大橋 武 (おおはし・たけし)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)在学中に、生徒が発行した版画誌『刀』(1928～1932)に参加。第1輯(1928)に『川ばたやなぎ』《社頭》と裏表紙、第2輯(1928)に『青桐』、第3輯(1928)に『風景』を発表。1929年同校を卒業。「大橋たけし」の表記もあり。【文献】『版画をつづる夢』(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

大橋英夫 (おおはし・ひでお)

佐伯留守夫、岩田信義、安西七郎ら9人が参加して発行した版画集『我等の版画』(刊年不明)に『風景』《静物》《菊の葉》の3点を発表する。この佐伯ら3人は川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に在学中、生徒によって発行された版画誌『刀』(1928～1932)に作品を発表している。【文献】『我等の版画』(刊年不明)(加治)

大橋文子 (おおはし・ふみこ) 1911～没年不詳

1911(明治44)年2月19日滋賀県に生まれる。文化学院専修科では1933年4月から石版や肖像画等の講習を始め、エッチング講習は10月に第1回(『エッチング』12)を、11月に第2回(『エッチング』14)を各1週間、西田武雄を講師に招いて開催した。専修科在学中の大橋も参加し、その時制作した作品が西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第12号に掲載される。文化学院で教師を勤めていた有島生馬や石井柏亭らが結成した一水会の第1回展(1937)に油彩画《室内》など3点を出品、1946年第8回展では会員に推挙される。東京渋谷区代々木本町に在住。【文献】『エッチング』12(1933.10)・14(1933.12)／『一水会第45回記念展図録』(一水会 1983)(加治)

大原定雄 (おおはら・さだお)

1931(昭和6)年の第3回プロレタリア美術京都地方大展覽会(6.19～21 京都・第二勸業館 主催：日本プロレタリア美術家同盟京都支部)に版画(題名など不明)を出品。当時、日本プロレタリア美術家同盟仙台支部に所属していた。【文献】『第3回プロレタリア美術京都地方大展覽会目録』(1931)(三木)

大平華泉 (おおひら・かせん) 1913～1983

本来、南画家で、水墨画の画家として活躍。画家としての履歴からは、版画制作については、全く知られないが、「華泉」の雅号で、伝統木版による耽美的美人版画を制作。成田守兼と「華泉」の共作による『艶姿二十四考』シリーズ(大判24枚)を、1931年頃に大阪の真美社から出版している。1913(大正2)年10月6日福島県に生まれる。本名正男。磐城佐賢学舎本科卒業。1930年同郷の南画家荒川華関に学び、のち1940年に上京し、松林桂月に師事。雅号の「華泉」は荒川華関から師の一字を受けての名であろう。版画制作は松林桂月の門に入る以前の若描きなのであろう。1946年春の第1回日展で《冬山》初入選。毎回入選を重ね、1952年第8回日展で特選・朝倉賞。1967年日本南画院第7回展で《山韻》が文部大臣賞・桂月賞受賞。1977年に日展会友、1978年日本南画院副理事長。晩年は世田谷区に住む。1983(昭和58)年8月23日逝去。著書に『水墨画の鑑賞〈大平華泉とその作品〉』(1978)、『大平華泉水墨山水画集』(1980)、『水墨画のこころ〈大平華泉遺墨集〉』(1990)がある。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

大平邦夫 (おおひら・くにお)

青森県黒石町において安芸蜻一が中心となって発行した版画誌『はなが』第2号(1933.2)に《支那人形》、第3号(1933.3)に《雪》を発表。現在『はなが』の第1号は未確認。【文献】『はなが』2・3 (加治)

大平茂樹 (おおひら・しげき)

岐阜県本巣郡に生まれる。岐阜県大垣高等女学校に教師として勤務し、県内でのエッチング普及のために、1937年7月には同女学校において、1938年8月には岐阜中学校において講習会を開催する。講師を務めた西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』(1932～1943)にその時の事情や感想を寄稿している(『エッチング』71)。版画制作としては師であり友人であった武藤完一の主宰する版画誌『九州版画』第10号(1936.4)に《五島中野浦》、第11号(1936.7)に《十字架のイエズス》の木版画を発表。エッチング講習会後の第18号(1938.11)の《礼子像》からはエッチング作品となり、第19号(1939.6)に《噫坂君》、第20号(1939.11)に《鬼岩》、第23号(1941.6)に《アラコク童貞》、最終第24号(1941.12)には《三人裸婦》を発表。当時、岐阜県本巣郡川崎村森に在住。【文献】『エッチング』58(1937.8)・71(1938.9) / 『九州版画』24 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

大筆敏夫 (おおふで・としお)

1928(昭和3)年5月の造形美術協会第1回展に《風景》2点(油彩画か)、同年11月の第1回プロレタリア美術大展覽会に《長崎村の農民》《同志の顔》(油彩画か)を「大筆敏夫」の名でそれぞれ出品。その後、加藤版画研究所(1929設立)より版画集『モダンガール』(10点組 刊行年不明)を刊行。1938年4月の造型版画協会第2回展に「大筆龍夫」の名で《町の風俗》(合羽版か)を出品。出品時の住所は東京。また、同年5月の『浮世繪界』(第3巻第5号)の口絵に合羽摺りの大首《時局調》が掲載され、「かねて合羽摺の新しい表現に努力してゐられる大筆君の時局調戦時姿の大首絵を口絵に撰んだ。合羽摺の上手石渡〔庄一郎〕君は、その技頗る細微に入り、殆ん

ど技巧の極地に達した。大筆君の技はやゝ粗だが、本来の合羽摺の技巧的性格を尊重し、その範囲で之を活用し、独自の画境を開拓しつつある。その芸術観については次号に説く所があるであらう(無署名=橋崎宗重か)と紹介されている。その後、同年7月の同誌(第3巻第7号)に「新風俗画への展望」が掲載された。【文献】『浮世繪界』3-5(1938.5)・3-7(1938.7) / 岡本唐貴・松山文夫編『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967) (三木)

大間知龍之介 (おおまち・りゅうのすけ) 生年不明～1939

富山県に生まれる。1929(昭和4)年東京美術学校彫刻選科塑造部に入学。彫刻を学ぶかたわら、校友会版画部の活動に参加。1930年11月に校内で開かれた「〔椎の樹〕版画展」に木版画《自画像》《風景》を出品したほか、1932年7月の第14回版画部展覧会にも出品した。1934年同校を卒業。1935年の第22回二科展には彫刻《弟の首》が入選している。1939(昭和14)年8月17日逝去。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) / 『校友会月報』29-7(東京美術学校 1931.1) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科』(同窓会名簿編集委員会 1972) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) (三木)

大見定五郎 (おおみ・さだごろう)

愛知県半田の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第10号(1935)に《登山》を発表。現在『運』は5～7・10号(1931～1935)のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

大宮 昇 (おおみや・のぼる) 1901～1973

1901(明治34)年4月23日愛媛県松山に生まれる。北予中学校を卒業。1924年『アトリエ』の懸賞作品の募集に《野菜を運ぶ女》(油彩画か)を応募し、第1巻第5号(1924.7)に選外佳作第三席として紹介されている。1925年上京し、生協活動に携わる。その後、石版画を学び、1935年の日本版画協会第4回展に《漁船》が初入選。以後、1942年の第11回展まで毎回石版画を出品。作品名は、第5回展(1936)が《炭山画譜の内撰炭場》《炭山画譜の内坑内にて》《炭山画譜の内撰削岩機》、第6回展(1937)が《人車に乗れる坑夫達(炭山画譜十葉の内)》《坑口(炭山画譜十葉の内)》、第7回展(1938)が《炭山図》、第8回展(1939)が《晩春》《小名木川風景》、第9回展(1940)が《石屋の庭》《小さき映画館》、第10回展(1941)が《埴料郡皆神山》《漁船(クロモ石版のためのモノタイプ応用習作)》《雨合羽の少女》《高原》、第11回展(1942)が《炭山図》である。1944年には会友に推挙されるも出品はしなかった。また、1940年に旭泰宏・森田路一と「新版画会」を結成し、1942年の第3回展まで同人展を開催している。1944年長野県に疎開。戦後は山本鼎の流を汲む農民美術運動に参加するも、1951年には運動からはなれ、版画制作に専念。1957年帰郷し、愛媛大学の講師を務める。1973(昭和48)年6月16日逝去。著書に『炭山画譜 大宮昇創作石版画集』(私家版 1936)、『繪読本 石炭を生む山』(学習社 1942)、『繪画と印刷』(弘学社 1944)、作品集に大宮真弓編『大宮昇遺作集』(私家版 1974 未見)がある。【文献】『20世紀物故洋画家事典』(美

術年鑑社 1997) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

大村麻紅 (おおむら・まこう)

京都創作版画会第2回展(会期不明 1930～1932の間に開催)に木版画《無題》を出品。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984.3) (三木)

大村喜昭 (おおむら・よしあき)

斎藤無沙史・松川昇太郎と「好刻会」を結成(時期は不明)。1932(昭和7)年に「好刻会版画展」(2.13～? 日本橋・白木屋)を開催し、『版画C L U B』第4年第3号に「出品多数にして相当の盛会であつた。一般公募はせず会員のみの作であつた」と紹介されている。【文献】『版画C L U B』4-3(1932.4) (三木)

大森 智 (おおもり・さとし)

西田武雄が主宰する日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第9号(1933.7)にエッチング作品を発表。当時は東京市淀橋区大久保尋常小学校に勤務。【文献】『エッチング』9 (加治)

大森繁司 (おおもり・しげじ)

東京に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科の生徒による版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《舞踏場裏》と《習作》を発表。1937年同校を卒業。現在『刀画』は2号のみを確認。【文献】『東京高等工芸学校一覧 昭和14年版』(1940) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

大森桃太郎 (おおもり・とうたろう)

経歴は不明であるが、1932(昭和7)年に西田武雄の手ほどきで銅版画を始め、同年12月発行の『エッチング』第2号に《樹》の図版が掲載される。西田は「大森君は近頃エッチングを始められたのですが、大変熱心なので、最初のプレートにしては上出来です。素描をいつも勉強しておられるので其結果でせう」と紹介している。また、翌1933年5月と6月の『エッチング』(第7・8号)では「研究所製エッチングプレス所有者」として紹介され、肩書きは「洋画家」となっているが、7月の第9号以降は消息が途絶えている。なお、同年5月の『版画荘』[第3号]所収の「創作版画展観即売目録」にも、「二六五大森桃太郎氏 小供(エッチング) 三三×三九〔寸〕 三・五〇〔円〕」「二六六 戸山ヶ原(エッチング) 三三×六〇〔寸〕 五・〇〇〔円〕」の記載がある。【文献】『エッチング』2・7・8 / 『版画荘』[第3号] (三木)

大矢一の舎 (おおや・いちのしゃ)

新潟では文芸・美術などの芸術を扱った同人誌『土塊』(1927～1929)が発行され、その第2号(1928.1)に《魚》を発表。大矢の版画作品はこの号のみで、第1～7号には短歌や詩が寄稿されている。【文献】『佐藤哲三の時代』図録(新潟県立万代島美術館 2008) (加治)

大矢竹雄 (おおや・たけお)

1931年6月東京で行われた第1回新興版画展の大分出張展(8.5～6 大分市丸吉呉服店)に版画1点を出品。【文献】『郷土図画』5(版画特集号)(大分県美育研究会

1931.10) / 武藤隼人『版画家・武藤完一資料集(戦前篇I) 一作家年譜を中心として』(東京学芸大学大学院修士論文 2010.2) (樋口)

大山明吉 (おおやま・めいきち)

横浜高等工業学校に在学中、同校において開催された西田武雄講師によるエッチング講習会(1933.11.11～12)に参加(『エッチング』13 1933.11)。制作した作品が西田発行の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第14号(1933.12)に掲載され、「大山君の風景も高工講習会の時の佳作」と西田に評される。【文献】『エッチング』13・14 (加治)

大山好夫 (おおやま・よしお)

1937年11月25日から5日間、東京の日本橋東小学校で開催された教師対象の木版画講習会(講師:平塚運一)に参加する。その記念版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《賀状》を発表。第2号の目次には名前の掲載はあるものの、間に合わなかったためか、作品は貼付されていない。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岡 鹿之助 (おか・しかのすけ) 1898～1978

1898(明治31)年7月2日東京市麻布に生まれる。父は劇評家・岡鬼太郎(本名嘉太郎)。美術史家・岡畏三郎は実弟。麻布中学校在学中から岡田三郎助に素描を学び、1924年東京美術学校西洋画科卒業。同年南城一夫とともに渡仏。藤田嗣治と親交し、サロン・ドートンヌ等に出品。14年間パリに滞在するが、第二次世界大戦の勃発により1939年に帰国。翌1940年に春陽会会員として招かれ、以降主要メンバーのひとりとして活躍する。1964年日本芸術院賞受賞。1969年日本芸術院会員。1972年文化勲章受章。1978(昭和53)年4月28日逝去。戦前の版画制作は、パリ到着の翌年1925年に《牧童》と題するエッチング・アクアチント作品のみが知られている。また、戦後の作品としては、《(鹿のいる風景)》(日夏耿之「呪文」より 1947)、《梟》(私家版 1955)、《観測所》(明治書房 1955)、《蛾》(春陽会 1956)、《雨やどりする鳥》(美術出版社版画友の会 1957)、《粉挽場》(美術出版社『岡鹿之助作品集』特装本収録 1957)、《魚》《菓》(美術出版社 画集『岡鹿之助』特装本収録 各1964)、《樹》(川端康成『雪国』特装本収録 1970)、《葡萄》《梟》《クレマチス》《粉ひき場》(各1974)、版画集『7枚のリトグラフ』(Ateli-es Guillard Gourdon et Cie 1974)などのリトグラフ作品や、木版画集『岡鹿之助版画集』第1輯・第2輯(加藤版画研究所 1970・1973各全6枚)などがある。【文献】『岡鹿之助作品集』(美術出版社 1978) / 『岡鹿之助展』図録(京都国立近代美術館 1998) / 『岡鹿之助展』図録(ブリヂストン美術館 2008) (樋口)

岡 茂夫 (おか・しげお)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)4年、5年在学中に、生徒による版画誌『刀再版』(1940～1941)発行に参加。その第1号[1940]に《風景》、第2号(1940.10)に《風影》、第3号(1941)に《小径》、第4号(1941)に《畑》、第5号(1941)に《青会の一隅》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

丘 紫郎 (おか・しろう)

静岡で中村岳が発行した詩と版画の同人誌『有加利樹再刊』第1号(1929.12)に「丘紫郎」の名で《習作(風景)》を、第2号(1930.3)には「丘司郎」の名で《EXLIBRIS》を発表。紫郎、司郎とそれぞれ表記されているが、同一人と判断。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岡 常次 (おか・つねじ) 1893～1970

1893(明治26)年11月21日新潟県佐渡相川町に生まれる。旧制中学校卒業後、洋画家を目指して上京。白馬会洋画研究所に入所し、黒田清輝門下となる。1914年からは葵橋洋画研究所の主任研究員を務める。1923年に学習院大学の講師となり、助教授・教授を経て1946年に退官。その間、光風会第3回展(1914)に油彩《友の顔》が初入選し、第5～7・10・12・15回(1928)にも入選する。並行して文展第9回(1915)に《暑中》を、以後も第10・11回(1917)と連続して入選。光風会第15回以降は個展により作品を発表し、洋画家としての活動を続けた(『エッチング』38 1935.12)。学習院の教官として、エッチング研究所が開所する以前の1931年に西田武雄を講師として第1回エッチング講習会を、開所後の1933年10月には第2回目を開催(『エッチング』13 1933.11)。その後、学習院では中学校の図画工作の正課としてエッチング制作が取上げられた(『エッチング』65 1938.3)。これは全国でも最初のことであり、その事情を西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第21号(1934.7)に「中学校に於けるエッチングに就て」として寄稿している。版画作品としては同誌第13号(1933.11)にエッチング作品を発表。1970(昭和45)年7月に逝去。【文献】相川町史編纂委員会編『佐渡相川町郷土史事典』(相川町 2002.9)／『エッチング』13・21・21・65 (加治)

岡 徳二郎 (おか・とくじろう)

1922(大正11)年2月に神戸で開かれた神戸弦月画会主催創作版画展に木版画《春あたゝか》《幸あれ此の大地に》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『創作版画展覧会目録』(神戸)弦月画会 1922) (三木)

岡 落葉 (おか・らくよう) 1879～1962

1879(明治12)年7月19日山口県平生町に生まれる。本名恵介。山口中学卒業後、19歳で上京、東京美術学校に学ぶ。小学校時代に国木田独歩の弟収二と同窓だったことから、独歩と親しく、独歩『武蔵野』の装丁や独歩が編集主任の『近時画報』などに挿絵を描く。版画は、吉井勇『漫画漫筆 ねむりぐさ』(俳書堂 1906)や文芸誌『趣味』第5巻第4号(易風社 1910.3)、『白樺』第3巻第4号(洛陽堂 1912.4)に木版挿画、短歌雑誌『車前草』復刊第1巻第3号(辰文館 1913.5)に木版表紙絵と扉絵を制作する。多くの文士と親交。1962(昭和37)年2月1日逝去。【文献】青木茂「新・旧刊案内14」『一寸』14(学藝書院 2003.4)／寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005)／岡落葉『明治大正の文士』(日本古書通信社 こつう豆本92 1990) (樋口)

岡崎 孝 (おかざき・りょうこう)

1936(昭和11)〔夏〕、各地にエッチング協会が生まれた。京都エッチング協会(中井平三郎方)、大分エッチ

ング協会(武藤完一方)、青森エッチング協会(今純三方)、名古屋エッチング協会(長船一雄方)、北九州エッチング協会(田中博方)などと並んで、熊本県阿蘇郡内牧町に内牧エッチング協会(久富季人方)が設立され、内牧エッチング協会創立会員(4名)の一人として名を遺す。【文献】『エッチング』47(1936.9) (樋口)

小笠原健司 (おがさわら・けんじ)

長野県東筑摩郡中山に生まれる。長野県師範学校第一部2年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹氷』第3号〔1941〕に《母》を発表する。1944年同校を卒業。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

小笠原精一 (おがさわら・せいいち)

雅号は大夢庵。大夢庵一写、大夢庵青天も使用。青森で発行された青森創作版画研究会の版画誌『彫刻刀』第2号〔1931〕に《鉄路に沿ふて》、第3号〔1931〕に《燈籠》《佞武多》と表紙題字、第4号〔1931〕に《海村》《めざし》、第5号〔1931〕に《野内風景》《菊》、第6号〔1932〕に《賀状》《角兵衛獅子》《雪の街》と表紙絵《賀状》、第7号〔1932〕に《二階ヨリ》と表紙題字、第8号(1932)に《木挽場》と表紙題字、第9号(1932.4)に《ナンテン》、第10号(1932.5)に表紙題字、第11号(1932.6)に《しゃこ》と表紙字、第12号(1932.7)に《玩具》を発表。その改題誌の『陸奥駒』第16集(1934.12)に《年賀状》を発表する。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

岡島癸巳郎 (おかじま・きしろう)

1929(昭和4)年2月の京都創作版画会第1回展に木版画《牛》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』(1929.2) (三木)

岡田五十男 (おかだ・いそお)

東京に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工芸部)在学中、印刷工芸科の生徒による版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《月夜と乗馬》を発表。1937年3月同校卒業後は大日本印刷(株)に勤務。現在『刀画』は2号のみを確認。【文献】『東京高等工芸学校一覽 昭和14年版』(東京高等工芸学校 1940)／『創作版画誌の系譜』(加治)

岡田栄次 (おかだ・えいじ) 1894～1977

1894(明治27)年岡崎市丹坂町に生まれる。1914年に愛知県第二師範学校卒業後、額田郡山中小学校を始めとして、1947年の連尺小学校校長を最後に退職するまで教職に従事する。その一方で洋画家として創作活動にも情熱を傾け、1925年岡崎で近藤孝太郎らによる「我々の会」の旗揚げに参加。また同年に村松隆次、小野英一らが創刊した版画誌『版画』が改題して『試作』となり、その第2巻2号(1926.5)に《辻》を、第2巻3号(1926.7)に《風景》を発表。退職後は岡崎市議会議員として4期16年、また岡崎市文化財審議会会長などの公職も務めた。椿会同人。1977(昭和52)年逝去。当時岡崎市伊賀町に在住。【文献】『近藤孝太郎とその周囲』図録(岡崎市美術館 1983)／『創作版画誌の系譜』(加治)

岡田九郎（おかだ・くろう）

1918（大正7）年11月の『美術新報』（通巻287号）にエッチング《自画像》と《〔風景〕》の図版が掲載されている。岡田についての詳細は不明であるが、1914年3月に開催された第5回〔三越〕洋画小品展（3.20～？駿河町・三越）の出品者に名前があり、また、同年11月の『仮面』第3巻第11号に翼画会と国民美術協会の展覧会批評を寄稿している。その後、渡米。1917年5月の『みづゑ』第147号には、「紐育在留の同氏はコーハンエンドハリス座三月興行の「柳の木」（三十三間堂）の背景の一部を擔任揮毫せり」との消息が伝えられている。【文献】『美術週報』1-24／『仮面』3-11／『美術新報』287／『みづゑ』147（三木）

尾形月耕（おがた・げっこう） 1859～1920

明治錦絵の代表的絵師（画工）で、近代的挿絵、口絵でも大いに活躍した。1859（安政6）年9月15日、京橋弥左衛門町（現在の銀座9丁目3番地）に生まれる。幼名は正之助。父は名鏡清二郎（庄之助との説もある）。後に苗字は「尾形」、「田井」を名乗る。家業は京橋弓町で提灯屋を営む。弟の次郎吉は河鍋暁斎に学び、22歳で夭折した瀧村弘方（1868～1889）である。月耕は、写生研鑽を専らにして独学の道を歩み、菊池容斎の画風に親しみ、錦絵の初筆は1877年西南戦争勃発に因む韓論の大判錦絵三枚続絵。その後、花瓶への絵付け画工として尾形光哉の家名を襲名し「尾形」を名乗る。1883年から春陽堂出版物の表紙絵、挿絵を手がけ、「尾形」の他に「名鏡斎」を併用して作画量随一の挿絵画家となり活躍。1884年に結成された「鑑画会」に参加し本格的な日本画練成に励む。1888年に弟子の田井俊斎の娘「喜久」と再婚し、長男正子（後の尾形月三、月山の幼名）が生まれた。この再婚から「田井」の名前も使用。挿絵では、春陽堂、金港堂、雑誌では『小国民』、『幼年雑誌』、特に『風俗画報』には1889（明治22）年から明治30年代末頃まで係わっている。錦絵シリーズの主なものには1887年からの「美人花鏡」（武川利三郎版）、「月耕随筆」（武川利三郎版、後に松木平吉）。1890年の「宇喜世十二月」（横山良八版）。1891年の「婦人風俗尽」（佐々木豊吉版）。1892年からの「源氏五十四帖」（横山良八版）、「義士四十七士図」（武川利三郎版、後に松木平吉）等。1894・95年の日清戦争錦絵。1895年からの「花美人名所合」（松木平吉版）三枚続絵シリーズは特に評価の高いもの。日本画でも、1893年から日本青年絵画協会第2回展に出品し一等褒状受賞、同年のシカゴ、コロンプス博覧会には《江戸山王祭》が好評を得て、翌1894年第3回展からは審査員。1898年の日本美術院創立の正員メンバー。『以呂波引 月耕漫画』（東陽堂）の著がある。多くの門下生が活躍。1920（大正9）年10月1日肺癌に喉頭癌を併発して牛込小川町の自宅にて逝去。墓は雑司が谷墓地にある。【文献】岩切信一郎「尾形月耕—明治10年代から20年代の活動を中心に—」『浮世絵芸術』14（国際浮世絵学会 2002）／『浮世絵大事典』（東京堂出版 2008）（岩切）

尾形月山（おがた・げっさん） 1887～1967

尾形月耕の長男として1887（明治20）年9月10日東京京橋に生まれる。本姓は田井、本名は正子（まさつぐ）。初号は月三。1900年、13歳で連合絵画共進会三等褒状。日月会、翼画会会員。1908年文展に入選以来、活躍し入賞。人物・仏画など描く。1920年「月山」に改号。歴史画を

得意として日露戦争の錦絵などの、伝統木版での版画の存在も知られる。雑誌の挿絵も描き、講談社絵本の画家としても知られる。息子礼正（ひろまさ）も挿絵画家で伊豆修善寺温泉に在住であった。1967（昭和42）年12月27日逝去。【文献】『美庵 Bien』45・尾形月耕とその一門特集号（芸術出版社 2007.8）（岩切）

岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ） 1869～1939

1869（明治2）年1月12日佐賀に生まれる。幼名は石尾芳三郎。1887年岡田家の養嗣子になる。同年洋画志望を認められ、曾山幸彦に学ぶ。1887年久米桂一郎、黒田清輝に師事し、1896年黒田らによる「白馬会」の創立に参加。また、同年東京美術学校に新設された西洋画科の助教授となる。1897年西洋画研究としては第1回の文部省留学生としてフランスに留学し、ラファエル・コランに師事。1902年帰国し、東京美術学校教授となる。1907年の文部省主催展覧会（文展）開設以降は、官展の中心作家として活躍。女性像を得意とし、1919年に帝国美術院会員、1933年に帝室技芸員に任じられ、1937年には第1回文化勲章を受章するなど、日本の近代洋画界の重鎮として、輝かしい足跡を残した。創作版画運動ともかわりが深く、例えば、1928年に第8回帝展が展覧会規程の一部を改正し、創作版画を受理するようになったが、その背景には帝国美術院会員であった岡田の強い働きかけがあったという（山本鼎「日本版画協会の設立」『アトリエ』8-2）。また、同年日本創作版画協会名誉会員になり、翌1929年12月には織田一磨らと「洋風版画会」を創立している。1930年の文部省の欧州出張の際には、フランスでの「日本現代版画」の実現に向け、長谷川潔とともにフランス側関係者と会合。帰国後は、創作版画の作家たちの大同団結を促し、1931年1月の「日本版画協会」の設立に際しては会長職を引き受け、1934年のパリでの「日本現代版画とその源流」展、1936年の欧米9都市を巡回した「日本現代版画展」を実現させている。確認されている版画作品は余り多くないが、版上に「1902」の書き込みのある銅版画《風景》の作例があり、早くから銅版画を手がけていたことが知られる。展覧会の記録では、1928年の光風会第15回展にエッチング《秋の郊外》《晚帰》を特別陳列。1931年7月の洋風版画会第2回展にエッチング《裸婦》を出品。1935年の第4回日本版画協会展及日本現代版画米国展準備展覧に《晚帰》（色銅版）を賛助出品。また、1940年の岡田三郎助遺作展覧会（東京府美術館）には6点のエッチングが出品され、恩地孝四郎は「明治時代、蝕銅版、風景約サムホール大三点、中村研一森田亀之助二氏岡田家蔵。大正、夕暮（色蝕銅版）同、蝕銅、風景（同）この分は小型菊半裁位、岡田家及某家蔵、大里氏蔵の六点であつた。色エッチングは前に会報にかいたのは誤つてゐる。農人をかいた図柄であつた」と報告している（『日本版画協会会報』33）。西田武雄は「ビゴの所持していたプレス機」が岡田の画室にあったと証言（『エッチング』83）しているので、これらの作品はビゴゆかりのプレス機を使って刷られたのかも知れない。また、1932年に日本版画協会がフランス展の準備資金の一部に充てるために、12名の作家による石版画の頒布を計画。岡田も名を連ねているが作品は未見。1939（昭和14）年9月23日東京で逝去。【文献】『日本近代洋画の栄華 岡田三郎助』図録（佐賀県立美術館 1993）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

ジョネー岡田 (おかだ・じょねー)

「岡田英吉」あるいは「M・ジョネー打田英吉」とも名乗っていた。生没年未詳。1920 (大正9) 年1月の『美術月報』の雑件に「木版画機械刷の発明」として「英国人を父とし日本人を母とする混血児エム・ジョネー氏は数年来苦心の結果、木版印刷を従来の手摺から機械印刷する事を発明したるが効果は手刷に譲らざる由」とある。東京市外田端635に「日本木版印刷株式会社」を設立し、自ら機械操作と機械開発にあたる。版は伝統木版彫で、この版を(独自で改良発明した)活版印刷機で印刷。ただし水性インク使用でやはり人が付ききりで動かしていたとのこと。雑誌『国粋』の挿入木版画、伊東忠太著『阿修羅帖』、竹久夢二の版画(表紙貼付・挿絵)のある『婦人グラフ』(1924.5から)の仕事が良く知られる。奥山儀八郎の広告版画制作にも関与。その他にも精密な浮世絵(江戸錦絵)複製、楽譜の表紙絵、雑誌の表紙絵、挿入版画などの優れた木版の仕事がある。【文献】奥山儀八郎「版画職人 ジョネー打田英吉伝」『日本の木版画』(慶文社 1977) (岩切)

岡田清一 (おかだ・せいいち)

1941年当時、朝鮮大邱師範学校に勤務。住んでいた朝鮮の人々の暮しや風景を版画にして、九州大分で武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第17号(1938.5)に《薬水》、第18号(1938.11)に《芋売り》、19号(1939.6)に《チゲの男》、第21号(1940.6)に《南鮮の農家》、第22号(1940.11)に《洗濯に行く》を発表。また、朝鮮釜山で清永完治が発行した版画集『朱美之集』(1940~1942)の第1冊(1940.5)に《陽春街頭スケッチ》《蔵票(冬ノ号)》、第2冊(1940.8)に《屋根》《庭》、第3冊(1940.12)に《秋果を売る》を発表する。そのほか、蔵書票にも興味をもち、佐藤米次郎編集の『趣味の蔵書票』第5回(1940)に作品を発表し、朝鮮京城府三越ホールで開催された「蔵書票展覧会」(1941.10.16~19)にも出品(『エッチング』108 1942.1)する。当時は大邱府三笠町76に在住(『朱美通信』2)。共著に『アイデアを育てる学校工作』(日本学校工作普及会 1965)あり。【文献】『九州版画』24(1941.12) / 『エッチング』108 / 『福岡市美術館所蔵目録』(1992) / 『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館2001) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

岡田高志 (おかだ・たかし)

1938(昭和13)年4月の造型版画協会第2回展に木版画《場末の風景》、翌1939年5月の第3回展に木版画《子供》を出品。出品時は東京に住む。【文献】『造型版画協会第二回展目録』 / 『造型版画協会第三回展目録』(三木)

岡田龍夫 (おかだ・たつお) 1904? ~ 没年不詳

1904(明治37)年頃、北九州生まれか。1920(大正9)年頃、東京銀座の切抜通信社に勤務し、戸田達雄と知り合う。1922年三科インデペンデント展に出品。1923年「マヴォ」結成に対抗して加藤正雄と二人展を開催、また『東京朝日新聞』(8.18・19)に「意識的構成主義への抗議—村山知義氏へ」を連載し、村山知義批判を展開した。しかしその後、マヴォ同人となり展覧会やダンス等のパフォーマンス、建築装飾、雑誌発行などで村山と協力して前衛芸術運動を推進した。1925年首都美術展や三科第2回展(公募展)に出品。この年復刊したマヴォの機関

誌『マヴォ』の編集・誌面構成を担当するとともに、村山知義訳、エルンスト・トラウー詩集『燕の書』(長隆舎書店)に10数点のリノカットを提供、さらに萩原恭次郎詩集『死刑宣告』(長隆舎書店)の装幀・挿絵・誌面構成に取り組み、美術作品と呼べる本を制作した。三科解散後はアナーキストの立場を表明した。また1926年にマヴォ運動の継続をはかって「マヴォ大聯盟再興に就て」と題する声明文を発表し、その後牧寿雄らと関西で、舞台模型映画セット展覧会やマヴォ創作舞踊発表会などを開催、継続してマヴォイストとしても活躍した。さらに街頭漫画屋と称し、似顔絵かきとしても活動した。1928年リノカットによるタブロイド版の画報誌『形成画報』を創刊。1930年代に満洲に渡り、その後、京城(現・ソウル)でフリーの記者として活動したと思われる。戦後の消息は不明だが、聯合プレス発行『丸』6巻11号(1953.11)に、「第6次中共引揚者」の岡田龍夫という人物が、戦後中国東北地方での生活について報告していて、マヴォの岡田と同一人物である可能性がある。【文献】滝沢恭司「マヴォの国際性とオリジナリティー—『マヴォ』とその周辺のグラフィズムをめぐる』『Fuji Xerox Art Bulletin』(2005) / 『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) (滝沢)

岡田豊高 (おかだ・とよたか)

生没年不詳。1924(大正13)年9月発行の『マヴォ』3号(かんしゃく玉を貼り付けた高見沢路直のカラージュ作品によって発禁)に、リノカット《苦しめる神経痛》を寄せた。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) (滝沢)

岡田文雄 (おかだ・ふみお)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)5年在学中、生徒が発行した版画集『刀再版』(1940~1941)に参加。その第1号[1940]に《庭》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岡田義禮 (おかだ・よしのり)

九州大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』(1933~1941)の第1号(1933.9)に《村道》、第2号(1934.1)年賀状特集に《犬の図》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岡野 栄 (おかの・さかえ) 1880 ~ 1942

1880(明治13)年4月7日東京市赤坂に生まれる。白馬会洋画研究所に学び、黒田清輝に師事。1902年東京美術学校西洋画科卒業。1908年女子学習院に奉職し、後同校教授に。1912年光風会創立に参加。1925年から1927年宮内省在外研究生としてフランス、イタリアに学ぶ。また俳号「酒枝」と称し、俳句俳画を愛した。1942(昭和17)年3月21日逝去。版画は、吉井勇『漫画漫筆 ねむりぐさ』(俳書堂 1906)や『新小説』(春陽堂)、岡鬼太郎『江戸紫』(鈴木書店 1912)、山田花袋『朝』(春陽堂 1912)、『日本名勝写生紀行』(中西屋書店 全5冊 1906.9~1913.7)、鹿島佐太郎『オハナシ』(中西屋書店 1913)、『現代俳画集 春之部』(俳画堂 1915)などに木版や石版挿絵を制作。1915年三越新館5階で開催の「新古木版画展」に「新しい物には、戸張孤雁氏、岡野栄氏、岡本帰一氏、竹久夢二氏、山村耕花氏等の自画自刻の作品数十点があった」との紹介記事有り。【文献】『美術週報』2-2(1915.3)・14-11(1915.9) / 『日

本美術年鑑 昭和十八年版』(美術研究所) / 『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1997) / 『木版口絵総覧』(文生書院 2005) / 青木茂「新・旧刊案内 14・37」『一寸』14・37 (学藝書院 2003.4・2009.2) (樋口)

岡部忠之 (おかべ・ただゆき)

生没年不詳。1940 (昭和 15) 年朝鮮慶尚南道咸陽郡席卜小学校に、1941 年からは慶尚南海郡古縣校に、1943 年には慶尚南道晋州府晋州公立高等女学校に教師として勤務。当時住んでいた朝鮮半島の風景や人々の暮し振りを版画にして、九州大分で武藤完一の発行した版画誌『九州版画』第 15 号 (1937.7) に《洗濯女》を発表。それ以降の第 16 号 (1937.10) に《朝鮮のトラム》、第 17 号 (1938.5) に《水車》、第 18 号 (1938.11) に《門》、第 19 号 (1939.6) に《福神》、第 21 号 (1940.6) に《五ノ塔》、第 22 号 (1940.11) に《裸の塔》、最終第 24 号 (1941.12) に《機織》を発表。また、朝鮮釜山で清永完治が発行の版画集『朱美之集』第 4 冊 (1941.9) に《土堤の麦畑》を発表する。日本版画奉公会会員 (1943)。戦後は九州に引き揚げ、宇佐市ロータリークラブ会長や宇佐市文化協会会長を務める。【文献】『朱美通信』3 [1940.12] / 『日本版画』127 (1943.8) / 『福岡市美術館所蔵目録』(1992) / 『創作版画誌の系譜』 / 「宇佐ロータリークラブ概要」(ネット検索) / 「郷土の文化のともしび 『宇佐文学』記念号」(ネット検索) (加治)

岡村吉右衛門 (おかむら・きちえもん) 1916 ~ 2002

1916 (大正 5) 年鳥取市に生まれる。旧制鳥取第二中学 (現・鳥取東高校) 時代に柳宗悦の影響で民芸運動に参加。1933 年芹沢銈介に師事。染色家、民芸運動家。戦前に全編合羽摺手彩色の和綴本『萬葉四季花尽し』(私家版 1944 100 部) の型染版画を制作。戦後は『型染集高野紙紀州下古沢』(1948) や型染本『座右三宝之頌』(1955)、『李高熊抄紙傳聞』(1955)、『会津塩紙示現』(1956) など多数の私家版の型染本や『版と型の美』(美術出版社 1968) などの著書がある。2002 (平成 10) 年逝去。【文献】『日本の版画 V 1941 - 1950』図録 (千葉市美術館 2008) / 『山田書店古書目録』11 (1988.7) / 『山田書店新収目録』94 (2010 秋) / 「岡村吉右衛門 蝦夷絵から十二星座まで」(多摩美術大学美術館ホームページ) (樋口)

岡本 昭 (おかもと・あきら)

川上澄生が英語教師として赴任していた宇都宮中学校 (現・宇都宮高等学校) 3 年に在学中、生徒が発行した版画集『刀 再版』(1940 ~ 1941) に参加。その第 4 号 (1941) に《街》、第 5 号 (1941) に《秋》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岡本一平 (おかもと・いっぺい) 1886 ~ 1948

1886 (明治 19) 年 6 月 11 日北海道函館に生まれる。1889 年大阪に、1892 年東京に移り、1903 年商工中学校 (現在の日大三中、三高の前身) 卒業。1905 年東京美術学校西洋画科入学し、藤島武二らに師事。1909 年大貫カノ (後の岡本かの子) と出会う。1910 年同校卒業。同年、和田英作の媒酌でカノと結婚。1911 年第 5 回文展に《トンネル横町》が入選。帝国劇場で舞台芸術の仕事に 1 年余関わった後、夏目漱石に認められて 1912 年朝日新聞社に入社。漫画記者として、漫画に軽妙洒脱

な文章を添えたスタイルが評判となり、大正から昭和戦前にかけて活躍。美校時代の同級で読売新聞社の近藤浩一路とともに「一平・浩一路時代」と呼ばれた。また私塾「一平塾」を主宰し、近藤日出造、杉浦幸雄、清水崑などを育てる。1948 (昭和 23) 年 10 月 11 日疎開先の岐阜県で逝去。画家・岡本太郎は息子。版画は、俳句雑誌『層雲』百号記念出版版画集として刊行の『画集 街並木』(層雲社 1919.9) に《浴場の夕》《ロダンの〔線〕》など 14 点の木版挿絵。文藝誌『新思潮』第 2 次第 6 号 (1911.2) に木版挿絵《書齋に於けるトルストイ》や一枚摺木版画《市川左團次の楠正成》《中村歌右衛門の淀君》《〔遊女〕》などがある。【文献】寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005) / 『山田書店古書目録』11 (1988.7) / 『The Helen and Felix Juda Collection of Japanese Modern and Contemporary Prints』(CHRISTIE'S NEW YORK 1998) / 『山田書店新収目録』58 (2003 冬) / 青木茂「新・旧刊案内 4」『一寸』55 (学藝書院 2013.8) (樋口)

岡本甲子也 (おかもと・きねや)

長野県松本市西深志に生まれる。長野県師範学校第二部 2 年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹氷』第 1 号 2598 年版 (1938) に《松本城》を発表する。1939 年同校を卒業。1950 年当時は松本旭町中学校に勤務。【文献】『樹氷』1 / 『卒業生名簿 昭和 25 年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

岡本帰一 (おかもと・きいち) 1888 ~ 1930

1888 (明治 21) 年 6 月 12 日兵庫県淡路島に生まれる。父甚吉の仕事の関係で、1889 年北海道に渡り、1892 年東京に転居する。1906 年第一中学卒業後、白馬会葵橋洋画研究所で学び、後れて入所の岸田劉生、清宮彬らと親交する。1912 年岸田劉生、清宮彬、木村荘らと第 1 回ヒュウザン会展を開催。これが原因で、黒田清輝の逆鱗に触れ、白馬会葵橋洋画研究所を破門となる。1913 年フユウザン会 (第 2 回展で改称) は解散し、高村光太郎、岸田劉生、清宮彬らと「生活社」を結成するが長くは続かず、1915 年劉生らが「草土社」結成の頃には次第に疎遠となった。版画の制作は、創作版画初期の作家として、菊地武嗣など生巧館の彫師や岸田劉生など白馬会研究所の画家たちと同人誌『白刀』(白刀社 準備号 2 冊と 1910 年 11 月の創刊号) を発行し、各号に木版画を発表。同人の峰嶋尚志と二人で「岡本帰一・峰嶋尚志木版画展」(日本橋・三越 1913.10) を開催、二人で 50 余点を陳列した。また、『ヒュウザン』(日本洋画協会 第 3 号より『フユウザン』) 誌上に自刻木版画の発表や演劇雑誌『とりで』第 7・8 号 (劇団とりで社 1913) の木版表紙絵、木版画《NANKOKU NO KAJUEN》(1913)、《〔花〕》(年代不詳) などを制作。更に大阪朝日新聞日曜附録「版画展覧会」(1913.11.16) に木版画《男の首》と「自刻木版画に就て」が掲載され、『現代の洋画』第 23 号 (版画號) (日本洋画協会 1914.2) には《N.O の肖像》《夕の街路》など 5 点の木版画を発表する。だが、同号に寄せた「木版画に就いて」では、「もう今の自分は本気でコッコツ彫るほど呑気にはなれない。(中略) 木版は自分の何れの方面を表現するにしても最善な様式ではない」と述べ、自身の木版制作について、「さうするのは自分にとって経世上、大変に都合だからである」、「大抵の批評家は愚劣

にも盲目的な讃辞を以て私の木版画に報ひやうとした」、「私は只、版画の売れ行きが多であった事を感謝する」と、木版制作への行き詰まりを記す。この頃、富山房で編集の傍ら劇作や演劇評論をしていた楠山正雄の依頼を受けて制作した『アラビヤン・ナイト』（「模範家庭文庫」シリーズ第1・2巻 1915）の装丁、挿画の仕事が注目され、童話童謡雑誌『金の舟（後の金の星）』の主筆に迎えらる。1919年に畑中蓼坡、長田秀雄らと新劇協会を起し、1920年新劇協会第2回公演「青い鳥」の舞台美術、意匠などを担当して高い評価を受ける。1922年東京社の絵雑誌『コドモノクニ』第2号から絵画主任として同誌に関わり、版画から童画へ転向、童画家として活躍。1927年武井武雄、初山滋らと「日本童画協会」結成に参加。多くの雑誌や単行本に童画を描き、多忙を極める最中、1930（昭和5）年12月29日腸チフスで急逝。【文献】『日本の版画Ⅱ 1911-1920』図録（千葉市美術館 1999）／『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010）／『思い出の名作絵本 岡本帰一』（河出書房新社 2001）（樋口）

岡本月村（おかもと・げっせん） 1876～1912

1876（明治9）年9月10日岡山県西大寺に生まれる。旧姓佐藤。本名、詮。4歳で父と死別し、岡本家の養子となる。県立神戸商業学校に学び、1895年京都に出て、今尾景年に日本画を、1899年浅井忠に洋画を学ぶ。1904年神戸新聞社に入社、記者として日露戦争に従軍。また神戸大和絵協会幹事をつとめ、俳画家として俳句雑誌『ホトトギス』に第9巻第5号（1906.2）頃より木版挿画（コマ絵）や裏絵などを描く。1910年大阪朝日新聞社の挿絵画家となる。1912（大正元）年11月1日逝去。【文献】寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）／『20世紀物故日本画事典』（美術年鑑社 1998）（樋口）

岡本三郎（おかもと・さぶろう） 1911～1986

1911（明治41）年2月8日名古屋市に生まれる。静岡県立城内尋常高等小学校に学び、同級生に中川雄太郎がいる。1930年東京鉄道学校を卒業。静岡に戻り、鉄道に勤務か。同年静岡の木版画摺師四世「版隈」浦田熊治郎に摺りの技法を学ぶ。また、同年の第2回童土社展に木版画《窓外》を出品。同人となり、1933年の第5回展にも《松坂屋》を出品した。1932年版画同人誌『版画座』（1932.11～1934.6 16冊か）の結成に参加し、第1輯（1932.11）に《朝鮮人形の首》を発表。その後も第3・4・8～12輯（1933.1～10）に木版画を発表した。また、1934年には中川雄太郎の主宰する『かけた壺』（1930.10～1934.7 23冊）の第18号（発行日不明）に《海の見える風景》を発表している。戦後は印刷業（童芸工房 静岡市安東3丁目）を自営しながら、1955年静岡県版画協会会員に復帰。同展のほか、県展（静岡県芸術祭美術展）、静岡市展（静岡市市民美術展）に出品した。1986（昭和61）年静岡市で逝去。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房 1967）／『50回記念版画集』（静岡県版画協会 1985）／『静岡の創作版画 昭和前期・版画家たちの青春』図録（静岡県立美術館 1991）／『創作版画の系譜』（三木）

岡本大更（おかもと・たいこう） 1879～1945

1879（明治12）年9月14日三重県名張郡滝之原村に

生まれる。本名直道。幼少より絵筆を得意とする。1886年一家で上京。1901年京都に移住し、京都府農事試験場技士となって、蔬菜や果実などの写生に従事しながら独学で日本画を描く。1907年大阪に移り、浪花図案絵画競技会や大阪物産博覧会で受賞。以降大阪画壇で活躍する。北野恒富らと親交。1914年私塾「更彩画塾」を開いて、義妹の星野更園（岡本或は大江とも呼ばれる）や堀内更章、長男の更生などを育てる。1945（昭和20）年12月疎開先の香川県豊島で逝去。版画は、木版画《茶の湯》（年代不詳、1930年代頃か）の制作がある。【文献】『LIGHT IN DARKNESS: women in Japanese Prints of Early Showa (1926-1945)』（Fisher Gallery, University of Southern California 1996.4）／山田一生編『日本画家 岡本大更—その画業と更生・更園』図録（伊賀百筆編集委員会 2003）（樋口）

岡本唐貴（おかもと・とうき） 1903～1986

1903（明治36）年12月3日岡山県浅口郡連島村大字西之浦（現倉敷市）に生れる。本名、登喜男。1920年画家を志して神戸に出る。浅野孟府と知り合い二人で上京、原宿で共同生活を始めた。1921年浅野とともに目黒にあった彫刻家戸田海笛のアトリエに寄寓し、油彩画のかたわら彫刻を学んだ。1922年東京美術学校彫刻科塑像部に入学したが、翌年出席日数不足と授業料滞納により退学。1923年9月の二科会第10回展に初入選（東京での展覧会は関東大震災のため中止）、この時より「唐貴」と号した。同月神戸に移り、浅野らと新興美術家のグループ「DVL」を結成、三宮のカフェ・ガスを拠点に活動した。1924年東京を拠点に活動するグループ「アクション」同人となり第2回展に出品。またこの年、10月に三科の結成に加わった。一方、関西学院の学生らが中心となって発行した詩誌『横顔』（1924.11 創刊）に、浅野とともに同人として参加し、第5号の表紙を幾何学的構成の木版画で飾った。第9号・10号の表紙もデザイン。1925年写真家淵上白陽編集・発行の『白陽』に「画面構成」を連載、また浅野とともに美術雑誌『造型』を創刊した。さらにこの年開催の三科第1回展（会員展）、第2回展（公募展）に出品した。その後三科が会期中に解散されると、11月に矢部友衛、神原泰、浅野らとグループ「造型」を結成した。1927年にはこのグループを再編して造型美術家協会と改め、プロレタリア美術運動へと突き進んだ。1928年開催の第1回プロレタリア美術大展覧会から、最後の開催となる1932年の第5回展まで出品、この運動の牽引者として活動した。1929年と1932年検挙された。この運動では、運動の大衆化という観点から版画への関心を示している。1934年日本プロレタリア美術家同盟解散後運動の立て直しを図って関西で活動中盲腸炎で倒れ、回復後脊椎カリエスを発病して大阪にて闘病生活をおくる。1939年東京練馬にアトリエを建て、創作活動の拠点とする。1940年代には2度にわたって満洲を写生旅行した。戦後は1946年に矢部らと現実会を結成するとともに、日本美術会創設に会員として参加した。1948年共産党に入党（1958年脱退）。1962年全ソ美術家同盟の招きでソ連を訪ねた。1986（昭和61）年3月28日東京で逝去。【文献】平井章一「岡本唐貴、浅野孟府と神戸における大正期新興美術運動」・「同（承前）」『兵庫県立近代美術館紀要』5（1996）・6（1997）／『尖端に立つ男 岡本唐貴とその時代 1920-1945 展図録』（倉敷市立美術館 2001）（滝沢）

小川芋銭 (おがわ・うせん) 1868～1938

1868(明治元)年2月18日牛久藩士の子として江戸に生まれる。幼名不動太郎、のち茂吉と改名(繁吉とも)。5歳で新治県(現・茨城県牛久市)へ移り、父賢勝は農業を営む。叔父方、叔母方に寄寓しながら、1880年東京府芝区立桜田小学校を卒業。1881年本多錦吉郎の画塾彰技堂に入塾し洋画を学ぶ。1888年遠縁の尾崎行雄の推挙で「朝野新聞」の客員となり、スケッチや漫画を描く。1891年より「芋銭(自分の絵が芋を買うくらいにの銭になればいい)」と号す。1893年牛久へ戻り農業の傍ら、水戸の日刊紙『茨城日報』に漫画を寄稿。その後は新聞『いはらぎ』に寄稿し、没年まで漫画やスケッチ、俳句などを寄稿し続ける。1897年頃「牛里」の号で俳句を始め、1900年7月、高浜虚子編集の俳句誌『ホトトギス』に募集俳句が初入選、10月同誌の募集裏絵画(課題「秋のはじめ」)に応募し、4等となり初めて掲載される。以降『ホトトギス』の裏絵や表紙絵、挿絵(コマ絵)を制作。1903年『いはらぎ』の主筆・佐藤秋蘋の紹介で幸徳秋水を知り、1904年より幸徳秋水、堺利彦の発行する週刊『平民新聞』に挿絵や後に俳句、短歌等を掲載。同誌廃刊後は週刊新聞『直言』、日刊『平民新聞』、雑誌『光』などの初期社会主義の新聞雑誌や『読売新聞』『東京朝日新聞』などに挿絵を描き、漫画家として知られるようになる。1907年『東亜新報』の編集同人に招かれ上京するが、翌1908年病のため『東亜新報』を辞し、牛久に戻る。1915年小杉未醒・川端龍子、名取春仙、平福穂らと「珊瑚会」の設立に参加。1917年第3回珊瑚会展に出品した「水郷二題」《冬》他と《凶案》《雲影》が横山大観らの賞賛を得て、同年日本美術院同人に推挙される。以降は牛久沼の畔に住みながら湖畔の風物を描き、院展などに作品を発表した。河童の絵を多く残したことから「河童の芋銭」とも呼ばれる。1938(昭和13)年12月17日逝去。

若くして書や俳句に親しみ、草汁庵、芋銭、芋銭子などの号で多くの漫画やコマ絵、挿絵、俳画を残した芋銭には、これらを集めた個人或は他作家と合著の木版画集の刊行が多数ある。杉田雨人・小杉未醒らが尽力して『いはらぎ』や『平民新聞』などの版下絵を集めた『草汁漫画』(日高有倫堂 1908)。小杉未醒・正宗徳三郎・森田恒友らとの漫画をおさめた『漫画百題』(日高有倫堂 1910)。齋藤五百枝・岡村月村・小杉未醒らとの漫画をおさめた『漫画春秋』(日高有倫堂 1910)。高浜虚子編集『ホトトギス』の挿絵(コマ絵)を集めた『さし糸』(204 図中 32 図)(光華堂 1911)。石井柏亭、富田溪仙や小川未醒ら珊瑚会メンバーらとの『現代俳画集』春・夏・秋・冬之部(俳画堂 4冊 1915～1916)。一茶の句、漱石の書、芋銭の画になる『三愚集』(俳画堂 1920)など。また没後の刊行だが、『ホトトギス』と松瀬青々主宰『寶船』に掲載の作品の中から百作を集めた『小川芋銭翁草画帖』全4冊(横地信輔編 久保井市太郎彫刻 1939～1941)と『小川芋銭賦彩版画集』(1941)、いずれも創作版画の版元として知られる中島重太郎の青果堂からの刊行などがある。ただ、一枚摺の版画の制作は僅かで、上村松園、岡田三郎助ら18作家による『大近松全集』(木谷蓬吟刊行 1922.4～1925.9)の附録版画シリーズ(西村熊吉彫・山岸主計摺)に『囀山姥』の山姥)1図が知られるほか、『仮面』第3巻第10号(1914.10)の刊行案内に、小野竹喬の兄・小野益太郎(朱竹)が若き頃に主宰した「版画会」の第1回頒布作として小川芋銭《踊り子》を頒布したとの記事はあるが、作品は未見。『中央美術』第3巻

第4号(1918.3)の広告には、中島重太郎が主宰する日本風景版画会刊行の『日本風景版画』の予定作家に小川芋銭の名前が記されているが、こちらは未刊に終わったものと思われる。【文献】小川芋銭『草汁漫画(履製版)』(造形社 1976) / 『小川芋銭展』図録(東京国立近代美術館 1993) / 岩切信一郎「再考・版元中島重太郎の版画集発行」『一寸』16(学芸書院 2003.10)(樋口)

小川一満 (おがわ・かずみつ)

中島重太郎主宰の創作版画倶楽部が発行した『版画 CLUB』第1年3号(1929.5)のCLUB紙上展1回に《ブルドック》が入賞。選者恩地孝四郎は「ブル公やけにがんばってみますな。(中略)ほりばかしなどうまく利用されてゐるし」としている一方、「少し見方の粗末さが気になります」と評している。また、第1年5号(1929.9)の紙上展では《夜の飛行機場》が入賞、第2年1号(1930.1)の5回では《失題》が選外佳作になっている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小川沙久 (おがわ・さきゅう) 生年不詳～1936

本名は小川作蔵。東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第20号(1933.11)続々郷土玩具版画集に《あねさま》を発表。燐票(マッチ商標)蒐集家福山碧翠が創業したマッチ販売業「奴商行」は、関東大震災後、東京の神田末広町で広告マッチ商「やっこ商行」となり、愛燐家同士であった小川に引継がれた。沙久亡き後は子息が継ぎ、現在は本郷で「株式会社オガワ」として、創業100年を超え営業を続けている。当時、愛燐家の間では木版多色摺りで個人用燐票を作り、その出来映えを互いに競い、交換し合った。それは木版個人票と呼ばれ、小川も制作している。1936(昭和11)年5月20日逝去。【文献】加藤豊『マッチラベル博物館』(東方出版社 2004) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

小川茂麻呂 (おがわ・しげまる)

戦前[1930～31頃か]、浪花贅六庵蔵版の宝船の木版画や木版絵葉書を制作。1938年青龍社第10回展に入選。以後、第11～13・15回展(1943)に出品し、第12回展(1940)で社に推挙されている。【文献】『みづゑ』431(1940.10) / 『版画堂』目録80(2008.6) / 『山田書店新収目録』97(2011春) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(樋口)

小河新二 (おがわ・しんじ)

愛知県岡崎で発行された版画と文芸の同人誌『志じ満』創刊号(1926.11)に《がいこつのある机上》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小川翠村 (おがわ・すいそん) 1902～1964

1902(明治35)年5月15日大阪府泉南郡に生まれる。本名俊一。翠邨とも号す。1920年西山翠嶂に師事し、同年の第2回帝展に日本画《朝》が初入選。以降帝展、文展、新文展、戦後は日展と官展系作家として歩む。花鳥風景を得意とした。1964(昭和39)年5月11日京都市で逝去。版画は『新進花鳥画集』(マリア画廊 1931～1933)に《萩》《花鳥図》の木版2図を制作。【文献】『山田書店新収目録』66(2008春) / 『20世紀物故日本画事典』(美術年鑑社 1998)(樋口)

小川千鶴（おがわ・せんよう） 1882～1971

1882（明治15）年10月3日京都市に生まれる。本名太三郎。長兄は小説家・戯曲家の小川煙村（本名多一郎）。老舗書肆の家に生まれ、若くして教養を身につける。1907年仏画師北村敬重の弟子となり、傍ら関西聖護院で浅井忠に洋画を学ぶ。1910年上京し、兄・小川煙村の縁で俳句誌『ホトトギス』第14巻第4号（1910.12）以降に挿絵（コマ絵）や表紙絵、裏絵などを寄せる。1913年渡欧、1914年帰国。同年の第1回二科会展に水彩画を出品して入選するが、日本画に転じ、小川芋銭、平福百穂らと「珊瑚会」を結成。院展などに出品。その後は次第に南画家の道を歩む。1971（昭和46）年2月8日東京にて逝去。俳画を能くし、『現代俳画集』（俳画堂〔1915-17〕）、『俳画大観』（〔俳画刊行会 1919頃〕）などに木版画を制作するほか、『新錦絵帖 2の巻 イソツブ諭譚』（大鏡閣 1920）、『西洋風俗新大津絵』（1936頃）などの木版画集がある。【文献】『美術新報』14-11（1915.9）／『柳屋』付録（柳屋書房 1936.10）／『京都古書組合総合目録』17（2004.11）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（樋口）

小川 平（おがわ・たいら）

川上澄生が英語教師として赴任していた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）3年在学中に、生徒が発行した版画集『刀 再版』（1940～1941）に参加。その第4号（1941）に《家並み》、第5号（1941）に《無題》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

小川龍彦（おがわ・たつひこ） 1910～1988

1910（明治43）年11月5日静岡県静岡市鷹匠町に生まれる。1926年静岡商工補修学校を卒業し、静岡県立葵文庫に司書として勤める（1931.9まで）。1927年頃より木版画を独習し、1928年個人誌『まるめろ』（1928.8～12 4冊か）を創刊。各号に自作の木版画、詩、童話などを発表。翌1929年には中村岳、栗山茂、青木四郎らと版画団体「童土社」（のちの静岡県版画協会）を結成。展覧会（1929.10～1942.11 13回展まで）の開催や版画誌『ゆうかり』（1931.1～1935.8 30冊）の刊行などに中心的役割を果たすとともに、中村岳の『〔再刊〕有加利樹』（1929.12～1930.7 3冊）、栗山茂の『舂笛』（1930.3～8 3冊）・『飛白』（1934.7～1936.8 4冊）、眞澄忠夫らの『版画座』（1932.11～1934.6 16冊か）など、静岡の版画誌にも多くの作品を発表した。一方で、早くから洋画家横井弘三に心酔し、1929年には横井の主宰する「童心芸術社」の第1回展に版画14点と油彩2点を出品。出品をきっかけに、料治熊太（朝鳴）を知り、料治の主宰する『白と黒』（1930.2～1934.8 50冊）の第2号（1930.3）から作品を発表。1931年から1933年までは東京の料治宅に仮寓し、『白と黒』、『版藝術』（1932.4～1936.12 58冊）などの編集を手伝っている。また、帰静後も両誌の常連として作品を発表したが、『版藝術』第32号（1934.11）は「小川龍彦詩画集」の特集号となっている。公募展は、1931年の日本版画協会第1回展に《風景》が入選。以後、1938年の第7回展を除き、戦前は1942年の第11回展まで毎回出品。1941年には日本版画協会会員に推挙された。また、1932年の国画会第7回展（版画部）にも《木島風景》が初入選。1934年の第9回展に出品した《富士川附近》《兵営》で、国画奨励賞を受賞。第10回展（1935）、第11回展（1936）に

も入選している。戦争中は1944年と1945年の2回応召され、1944年の静岡の空襲で家屋、版画資材、全作品を失ったという。戦後は、1948年に静岡県版画協会の発足に参画するも、第3回展（1951）を最後に、展覧会での作品発表からは遠ざかっているようである。また、日本版画協会も同様で、1950年の第18回展に出品したが、以後は名前のみの会員だったようである。版画以外の動きとしては、1946年より静岡県観光協会に勤務（1973まで）。1947年からは静岡県史蹟名勝天然記念物調査委員、続いて静岡県文化財保護審議会委員も務め、登呂遺跡の発掘や保存などにも尽力した。1977年静岡県文化功労賞を受賞。1981年には静岡市立芹沢銈介美術館の初代館長に就任している。1988（昭和63）年6月6日静岡の自宅で逝去。翌1989年の第57回日本版画協会展に遺作が特別陳列された。【文献】『小川龍彦作品集—版画—』（小川澄彦 1989）／中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房 1967）／『50回記念版画集』（静岡県版画協会 1985）／『静岡の創作版画 昭和前期・版画家たちの青春』図録（静岡県立美術館 1991）／『創作版画誌の系譜』（三木）

小川知之助（おがわ・とものすけ）

日本創作版画協会の版画家たちが作品を寄せた版画誌『詩と版画』（1922～1925）の第5輯（1924.6）に版画5枚を投稿し、その中の一枚《〔草〕》が同号にカットとして掲載されている。選者の平塚運一は「摺りも非常によく、彫る技術も仲々しっかりしてゐる。花と草とは佳作である。風景は木の現はし方がアイマイである。人物はアヤフヤな感がある」と評している。小川知之助の表記あり。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

小川兵衛（おがわ・ひょうえい）

役者似顔絵を彩色木版にした雑誌『新似顔絵』（新似顔絵洞 1915 1編～4編と『新似顔記念號 御大禮奉祝画譜』の5冊）の1年第2編に《お松（松蔭）》、『御大禮奉祝画譜』に木版画1図（題名不詳）の作品がある。経歴など詳細は不明。【文献】『美術週報』2-5（1915.6）／『日本の版画Ⅱ 1911-1920』図録（千葉市美術館 1999）／『山田書店新収美術目録』69（2005冬）・76（2007秋）（樋口）

荻野一水（おぎの・いっすい）

経歴、生没年は不明だが、明治から大正にかけて京都で活躍し、当時は知名な青年図案家だったことが、『近代友禅史』（友禅協会 1927）や『於茂加げ』（1926.6）に記されている。『応用漫画』全2冊（山田芸艸堂 1903）、『垣間美具佐』全2冊（本田雲錦堂 1904）、『垣間美具佐 拾遺』全3冊（本田雲錦堂 1908）、『図案百題』全3冊（山田芸艸堂 1910）の4種の木版刊行物。その他に『とうか会』（山田芸艸堂 1907）と題される7枚綴りの木版扇面冊子に浅井忠、神坂雪佳、杉林古香、平田秋穂、吉川雅喬、河原華月とともに1図の作品を遺す。なお、「とうか会」とは、浅井忠が主宰した図案研究会ともいわれているが、名称の意味は不明。【文献】『近代図案コレクション モダン模様—大正のデザイン—』（芸艸堂 2008）／『山田書店新収目録』35（1998.12）（樋口）

荻野 弘（おぎの・ひろし）

静岡の栗山茂は中学校卒業記念に文芸と版画の同人誌

『艸笛』を発行。その第3号(1930.8)に《風景》と詩「秋の一隅 他」を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

荻生天泉(おぎゅう・てんせん) 1882～1947

1882(明治15)年福島県安達郡東和町の神官の家に生まれる。本名は守俊。1907年東京美術学校日本画科卒業。橋本雅邦に師事。同年第1回文展に入選。東京府立第一高等女学校に勤務し、その後も文展、帝展、新文展に出品。官展系の作家として活躍する一方、1920年福陽美術会(福島県出身の在京日本画家の会)を創設するなど、福島県の展覧会や美術運動にも関わった。1947(昭和22)年逝去。版画は、根上富治、永田春水とともに木版画集『瀬戸内三題』(大阪鉄道局 1935)に木版画1図を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』93(2010.7)／『うつくしま電子事典』(福島県教育委員会)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992)(樋口)

奥秀次郎(おく・ひでじろう)

青森の夢人社発行『月刊蔵票』第6号(1938.3)に《松村蔵票》を発表。同じく夢人社が発行した『趣味の蔵書票』第3号(1938.6)、第5号(1940.12)にも蔵書票を発表している。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

奥井泰夫(おくい・やすお)

慶応義塾普通部在学中、教師仙波均平の指導によりエッチングを制作。1936年11月8日同校教室にて開催された生徒作品展に《猫》を出品(『エッチング』49 1936.11)。その作品が西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第50号(1936.12)に掲載される。【文献】『エッチング』49・50(加治)

奥住蛟一(おくずみ・こういち)

号は古府。1926(大正15)年5月の第1回聖徳太子奉賛美術展に日本画《竹の蔭》を出品。その後、版画に転じ、1928年1月の日本創作版画協会第8回展に木版画《恋ヶ窪冬景》、同年2月の白日会第5回展に《牛》《画友之像》を出品。翌1929年1月の日本創作版画協会第9回展からは「古府」の画号を使い、《生麦風景》《陸前塩釜》を出品。また、同年9月の光風会第16回展にも「古府」の名で《蛟一自像》を出品した。その後の消息は不明。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)(三木)

奥住古府(おくずみ・こふ) → 奥住蛟一(おくずみ・こういち)

奥瀬英三(おくせ・えいぞう) 1891～1975

1891(明治24)年2月28日三重県上野市に生まれる。1909年京都市立第一商業学校を中退。1912年上京し、太平洋画会研究所に5年間学び、中村不折に師事。1914年第8回文展に油彩画《植物園》が初入選以降は、文展、帝展、新文展に出品を続ける。一方で1917年太平洋画会会員、1924年槐樹社結成に参加。1938年からは海軍従軍画家として中国やジャバ方面に赴く。戦後は1947年太平洋画会を退会して、石川寅治らと示現会を結成。1960年埼玉文化賞受賞。1975(昭和50)年11月23日浦和で逝去。版画は、1936年太平洋画会内に新設

された「日本新版画協会」から刊行の木版画集『新時代版画集』(前輯・後輯2冊、各輯5点、石川寅治・中村不折・吉田博など10作家)に木版画《南紀瀨峡図》(後輯)を制作。【文献】『日本の版画 1931-1940』図録(千葉市美術館 2004)／『日本美術年鑑』昭和51年版(東京国立文化財研究所 1978)／『山田書店新収目録』66(2005)(樋口)

奥田香苗(おくだ・かなえ)

和歌山県新宮市出身か。1932(昭和7)年に新宮市で結成された「熊野きつつき会」の会員で、5月の第1回展に木版画《小品》《燈台》を出品。翌1933年10月には和歌山県の紀南地方の作家が結集した「全熊野美術家協会」の結成に参加し、版画部に属す。同年の第1回展の出品については、目録を未確認のため不明であるが、翌1934年10月の第2回展には《小浜風景》《さくらんぼの静物》《佐野風景》《マッチペーパー》《宇久井風景》を出品している。同会は、戦前は1942年頃まで新宮市で展覧会を開催したが、出品の有無は不明。戦後は1947年に「熊野美術協会」と改称し、活動を再開したが、再開時の会員でもあった。【文献】『第一回版画展覧会出品目録』(熊野きつつき会 1932)／『和歌山の作家と県内洋画壇展<1912-1945>』図録(和歌山県立近代美術館 1984)／『熊野美術協会 第30回記念特輯号』(1978)(三木)

屋田清子(おくだ・きよこ)

大分県大野郡で生野正義ら教員仲間が発行した版画誌『大野版画』(1933～1934)第1号(1933.12)に《静物》、第2号(1934.2)に《犬(賀状)》、第3号(1934.5)に《チューリップ》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

奥田輝一郎(おくだ・てるいちろう) 1910～2001

1910(明治43)年1月19日京都市に生まれる。本名は「きいちろう」と読む。地元の京都市立壬生尋常小学校を卒業。卒業後は錦小路大宮西入にあった自宅兼工房で父とともに友禅職人として働かたわら、油絵、さらに版画を独習する。料治熊太の主宰する創作版画雑誌の常連で、『白と黒』(1930.2～1934.8 50冊)の第25号(1932.7)に木版画《松の芽》を発表したのを皮切りに、同誌に21回、『版藝術』(1932.4～1936.12 58冊)に10回、『郷土玩具集』(1934.6～1935.3 10冊)に5回、『土俗玩具集』(1935.4～1936.1 10冊)に8回、『再刊白と黒』(1935.6～11 4冊)に1回、『おもちゃ繪集』(1936.3～12 10冊)に5回と、計50回にわたり木版画や合羽版の作品を発表している。また、公募展にも出品し、1932年5月の第3回京都工芸美術協会展に版画が入選。同年の日本版画協会展第2回にも木版画《嵯峨野木場》が初入選し、以後、1937年の第6回展まで連続して入選しているが、第6回展入選の《洛北風景》はステンシルだった。また、1937年の第2回京都市展に版画《風景》が入選。以後、1943年の第8回展まで、第4回展を除き毎回出品した。戦後は版画制作から離れたようである。2001(平成13)年5月13日京都市で逝去。【文献】「奥田輝一郎氏旧蔵 版画関係資料」『総合資料館だより』151(京都府総合資料館 2007.4.1)／『創作版画誌の系譜』(三木)

奥田直泰 (おくだ・なおやす)

北大生を中心とした札幌詩学協会による第1回版画展覧会(札幌商業会議所 1925.10)に版画《像》を出品する。【文献】今井敬一編『北海道美術史』(北海道立美術館 1970) (樋口)

小口光彦 (おぐち・みつひこ)

長野県岡谷市下浜に生まれる。長野県師範学校第二部1年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹水』第2号(皇紀2600年版)(1940)に《春日神社》を発表する。1941年同校を卒業。1950年当時は上伊那郡辰野中学校に勤務。【文献】『樹水』2 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

奥富順三 (おくとも・じゅんぞう)

戦前作と思われる2点のエッチング《[農夫]》《[川のある風景]》が確認される。当時大垣市東校の職員(教員か)と思われるが、詳細は不明。【文献】『武藤完一スクラップ帖』(樋口)

奥野文雄 (おくの・ふみお)

生没年不詳。1926(大正15)年に、アナキスト詩人や美術家たちのグループ「野獣群」の美術号として、有泉譲と阿部貞夫が編集発行した『構成派』にリノカットと思われる《内燃性のPLAN》を掲載。【文献】『創作版画誌の系譜』(滝沢)

奥野路雄 (おくの・みちお)

生没年不詳。1931(昭和6)年第4回プロレタリア美術大展覧会に、《プログラムを見るピオニール》《公判傍聴におしかける》《モップル地区班会》《洗濯デー》《奪還》の5点の版画を出品。その前年開催の第3回展に、「奥野路夫」が油彩画《レポーター》、ポスター《凡ゆる反動団体を撲滅せよ》などとともに版画《メーデー(習作)》を出品しているが、同一人物と思われる。【文献】岡本唐貴・松山文雄編『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967) (滝沢)

奥村土牛 (おくむら・とぎゅう) 1889～1990

1889(明治22)年2月18日東京市京橋に奥村金次郎の長男として生まれる。本名義三。父金次郎は当時、「藍外堂」という出版社を営む。病弱で通学できず、10歳の頃小学校高等科を中途退学、その後夜学に通う。1905年父金次郎の斡旋で、梶田半古塾に入門、塾番頭格の小林古径の指導を受ける。翌1906年日本絵画展覧会に初入選。1912年通信省為替貯金局統計課に勤務し、ポスターや統計図、絵葉書などを描く仕事を5年ほど続ける。1917年通信省を退職。同年、明治の後半から描きためた京都風景や歌舞伎、落語小屋、東京市街風景、動物など60点を集めた『スケッチそのをりをり』(木版色摺、500部)を父金次郎が経営する朝陽舎書店(藍外堂改め)から出版。売り切れとなる人気で、後に他の出版社が版を借りて再版される。出版に際し、父金次郎の命名で「土牛」とぎゅう)と号す。1924第5回中央美術院展で《家》が中央美術賞を受賞。1926年古径の紹介で速水御舟の研究会に参加。1927年第14回日本美術院展覧会に《胡瓜畑》が初入選、以降は毎回入選、1932年日本美術院同人。その後は院展、新文展、日展などで活躍。1935年帝国美術学校(現在の武蔵野美術大学)教授。1944年東京美術学校

講師。1947年日本芸術院会員。1962年文化勲章受章。1978年日本美術院理事長となる。1990(平成2)年9月25日101歳で逝去。上述の木版スケッチ集『スケッチをりをり』に関して、『みづゑ』155号(1918.1)に、「梶田半古門人奥村土牛氏の作品を色刷木版として多数蒐めたり装釘瀟洒を極む、発行所京橋区和泉町西朝陽舎價一圓」の紹介記事が残る。【文献】近藤啓太郎『奥村土牛』(岩波書店 1987) / 『百寿記念 奥村土牛展』図録(山種美術館主催・日本橋三越本店七階ギャラリー 1989) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (樋口)

奥村博史 (おくむら・ひろし) 1889～1964

1889(明治22)年10月4日神奈川県藤沢市に生まれる。本名博。妻は平塚らいてう(本名明子)。逗子開成中学卒業後、大下藤次郎の日本水彩画研究所で水彩画を学ぶ。大下藤次郎逝去後は油絵に転じ、異画会と二科展に出品する。1925年日本水彩画会会員に推挙され(後年退会)、成城学園の図の教師となる。1933年富本憲吉の勧めで自作の銀指環を国展に出品し受賞、国画会工芸部の会員となる。以降画業と金工芸の制作を晩年まで続ける。1964(昭和39)年2月18日逝去。版画は、初期の画作時代に木版画を手がけ、雑誌『青踏』第3巻第11号(1913.11)の木版扉絵、第4巻第9号(1914.10)の表紙絵に自刻の木版画を寄せる。日本版画奉公会会員。【文献】寺口淳治・井上芳子編『大正期の雑誌における版表現』『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005) / 『日本版画』127(1943.8) / 小野忠重『近代日本の版画』(三彩社 1971) / 『日本美術年鑑』昭和40年版(国立文化財研究所 1966) / 『原色 浮世絵大百科事典』10(大修館書店 1981) (樋口)

奥山 勇 (おくやま・いさむ) 1906～1993

1906(明治39)年和歌山県に生まれる。和歌山師範学校第二部を卒業、小学校に奉職した。教員の発表会で絵画製版を披露して高評を得たことをきっかけに1931年頃から謄写印刷の研究をはじめ、その研究会に作品を提出して講評を受けていた大阪の小泉與吉をはじめ、関西の謄写版作家たちと親しかった。和歌山市で謄写印刷工房経営のかたわら孔版画を制作していた清水武次郎がつとめた木本小学校の先輩教員で、清水と知り合った1935年にはすでに熱心に謄写版の研究をはじめており、とくに絵画製版に優れ、清水に大きな影響を与えた。和歌山謄写会、のちに1941年に清水武次郎と和歌山謄写美術協会を創立、謄写印刷工房「蝸牛工房」を開き、『とうしゃ文化』をはじめとする謄写版印刷物の発行などの活動をともした。1993(平成5)年逝去。【文献】『紀学同窓会誌』 / 黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947) / 『とうしゃ文化』1(蝸牛工房 1946) (植野)

奥山儀八郎 (儀八) (おくやま・ぎはちろう) 1907～1981

創作版画家としてスタートし昭和モダニズム広告界の新進デザイナーとして「広告版画」で知られ、のちに伝統木版画での版画制作に転身する。昭和版画の奇才。1907(明治40)年2月17日山形県寒河江に生まれる。1920年、13歳で上京。1923年絵画や創作版画を上阪雅人に師事。1928年創作版画協会展第8回に《アンデルセンのマッチ売り》が初入選。同年には日本毛織会社宣伝部入社し1931年に退社するまでの間に木版ポスター40点制作。「広告版画のパイオニア」となる。1929年日

本創作版画協会展第9回に《大和村風景》と《丸ビル風景》が入選。4月には「儀八・丸ノ内風景個人展」(NIKKE画廊)を開催。儀八工房を新設し広告活動に専念。1931年には山名文夫、河野鷹思らと東京広告美術協会を結成。同年の日本版画協会第1回、翌年の第2回と入選。1940年旭正秀・畦地梅太郎・前川千帆等との「新版画会」会員となる。明治文化研究の碩学石井研堂を知り師事することで、伝統木版の価値を再認識し、重点を自画・自刻・自摺の創作版画から職人との協業による伝統木版画制作に移す。1943年芸術院会員5氏の肉筆の木版複製画を制作。1946年には「日本版画研究所」を創立し、広重の「東海道五拾三次」や「江戸近郊八景」等のシリーズの復刻。同研究所解散後、1954年に松戸市に移住。本格的な自作風景版画、海外画家名品の木版複製を制作。明治文化研究、珈琲研究家としての業績もある。代表的著書に『珈琲遍歴』(旭屋出版 1973)、『日本の木版画』(慶友社 1977)等がある。1981(昭和56)年10月1日逝去。【文献】田中典子編「奥山儀八郎年譜」『創造と伝統の木版画家奥山儀八郎』図録(松戸市教育委員会 1999)(岩切)

奥山康夫(おくやま・やすお)

1928年から1933年にかけて、版画と油彩画に活動の足跡を残す。版画は、1928年の第9回帝展に木版画《夜の静物》が初入選。翌1929年の日本創作版画協会第9回展にも《早春風景》《静物》が入選。1930年には、第2回聖徳太子奉賛美術展に《花と果物》が入選。同年の国際美術協会第2回内国展にも《曇日風景》《残照暮色》を出品し、協会賞を受賞。また、創作版画誌『きつつき』(中島重太郎編)の同人となり、創刊号(1930.7)に《愛煙小趣》、第2号(1930.9)に《赤電前》、第3号(1931.6)に《金魚》を発表している。1931年には白日会第8回展に《愛煙趣情》を出品。また、同年の日本版画協会第1回展に《桜田門内より》が入選し、1932年の第2回展に《聖橋》《すゐれん》、1933年の第3回展に《金魚》《漁船》をそれぞれ出品した。油彩画は春陽会に出品したようで、1930年の第8回展に《温泉風景》が初入選。その後、1932年の第10回展、1933年の第11回にも油彩画が入選している。なお、1933年6月の『エッチング』第8号に「本誌新購読者」として紹介され、住所は「世田ヶ谷区松原町一ノ九九」とある。また、翌月の第9号には「研究所製エッチングプレス機」の新所有者として紹介され、肩書きは「洋画家」となっているが、エッチングは未見。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』／『エッチング』(三木)

小栗慶太郎(おぐり・けいたろう) 1905～没年不詳

1905(明治38)年4月17日東京駒込に生まれる。仰高尋常高等小学校を卒業後、看板業や三越呉服店で裾模様を描く仕事などをしながら、絵画を独習。その後、河野通勢に師事した。公募展への出品は、1928年の国画創作協会第7回展に油彩画《四谷見附》など3点が初入選。翌1929年からは新発足した国画会展(第4回展)に出品し、以後1932年の第7回展まで連続して油彩画を出品した。また、1930年第2回聖徳太子奉賛美術展にも油彩画が入選している。エッチングの研究は、1933年春より始め、同年7月の『エッチング』第9号(日本エッチング研究所)に「研究所製エッチングプレス機」の新所

有者として紹介され、肩書きは「洋画家」となっている。8月には研究所が主催した第1回エッチング講習会(1日～3日)に参加。また、同月の第10号に「自画像 昭和八年七月廿八日 写」との版上書き込みがある《自画像》、14号(1933.12)と15号(1934.1)にそれぞれ《風景》の図版が、西田武雄の作品評とともに掲載され、例えば《自画像》については、「小栗君の自画像は明治時代の銅板(ママ)画の味で面白い」と評されている。翌1934年の国画会第9回展に銅版画《天神村風景》が入選。同年5月の『エッチング』第19号に入選作の図版と経歴が紹介されたが、この頃は文房具、フランス人形などの意匠も手がけていたようである。また、8月の第22号にはエッチングによる「大東京十二景」の頒布会の記事とその内の一作《浅草観音》の図版が紹介されている。1935年の第10回展に再び油彩画が入選したが、その後の活動は不明である。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『エッチング』(三木)

小栗幸八(おぐり・こうち)

版木会発行の創作版画集『版』第11輯(1937.12)に木版画を、第12輯(1938.1)に賀状を発表。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。なお、『版』(1937～1938)の目次は作者名のみで、タイトルは付されていない。【文献】『版』11・12(加治)

小栗美二(おぐり・よしじ) 1903～1969

1903(明治36)年4月27日岐阜県に生まれる。17歳で東京に移り、黒田清輝の指導を受ける。東京美術学校に入学し岡田三郎助に師事。新潮社出版書の装丁や研究社発行誌の挿絵等を描く。1923年同校を中退。1924年日活京都スタジオに招かれ、以降日活京都撮影所に在籍。サイレント映画の字幕の台詞やカットのデザインを担当。後に溝口健二映画の美術装置のデザインにも関わる。絵画の記録としては、1926年大阪朝日新聞社主催全国洋画総合展に入賞、1929年津田青楓の門下に入り津田塾展や二科展に出品。1932年京都洋画協会(顧問津田青楓、安井曾太郎)の設立に参加。「集団制作《浦島物語》」(1937)に北脇昇、今井憲二らと共に《竜宮の生活:D(厭飽)》を制作。1942年満州に渡り、満州映画協会に関わり、フィルム編集などを行う。戦後は1950年設立の京都市立美術大学(現在の京都市立芸術大学)の教授に就任。1969(昭和44)年1月29日京都で逝去。版画制作は、木版画集『萬華画譜』(中井正一序文 全40枚 1935)があり、その後新たに20枚を加えて『草華画譜』(草花画譜刊行会 1937頃 初版300部 大岩雅泉摺12輯(各輯5葉)全60枚)として刊行されたようだが、未見。その他木版画『団扇集』(1937頃か)などもあるが、こちらも未見。【文献】橘崎宗重「小栗美二・草花画譜」『浮世絵界』2-7(浮世絵同好会 1937.7)／『みづゑ』334(春鳥會 1932.3)／『洋画壇物語 1890-1940 画家たちの関西』図録(兵庫県立近代美術館 1989)／『山田書店新収美術目録』72(2006夏)(樋口)

小栗利一(おぐり・りいち) 1909～没年不詳

1909(明治42)年栃木県上都賀郡日光町上鉢石に生まれる。1924年に宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に

入学。当時、同校には版画家川上澄生が英語教師として赴任しており、生徒による版画誌『刀』(1928～1932)の発行に参加。その第1輯(1928)に《夏の正午》、第2輯(1928)に《日光植物園正門》、第3輯(1928)に《時計》、第4輯(1929)に《提灯》を発表する。1929年同校を卒業。木版画の技術を身に付けていたことにより、日光彫り(ひっかき彫り)を習得し、東武日光駅前で店を開業。在学中は川上澄生に心酔し、卒業後の版画制作は年賀状程度となったものの交際は続き、川上の紹介で日光を訪れた多くの版画家たちとの交流を持った。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

尾崎邦二郎(おさき・くにじろう) 1909～1979

1909(明治42)年6月25日静岡市に生まれる。1928年県立静岡中学卒業。1931年早稲田大学卒業。1932年『詩集 牧羊神』(谷島書店)を刊行、装丁の栗山茂を知って版画を始める。同年浦田儀一、真澄忠夫らと版画座を創立、版画誌『版画座』同人となり、第1～4、8～16号(1932.11～1934.6)に作品を発表。1933年第5回童土社創作版画展に出品し同人となる。また『白と黒』第40号(1933.10)、『版藝術』第11～19・21・27号(1933.2～1934.6)、『郷土玩具集』第1・2号(1934.6・7)、『櫟』第9号(1936.4)などの版画誌にも作品を発表する。1935年陸軍嘱託として中国に渡り、現地で終戦を迎え、1945年12月に日本に引き揚げる。戦後も版画活動を続け、1959年静岡県版画協会会員に復帰。1966年新槐樹社会員、県詩人協会会員となる。同年、県文化協会副会長に就任。1979(昭和54)年12月27日逝去。【文献】『静岡県版画協会第50回記念版画集』(静岡県版画協会 1985) / 『静岡の創作版画』(静岡県立美術館 1991) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

長田健雄(おさだ・たけお)

1932年8月の日本水彩画会研究所主催夏期講習会夜間エッチング講座(東京美術学校会場、西田武雄講師)に呉市から参加する。研究所製エッチングプレス所有者。『エッチング』59号に「隠岐の島紀行」を寄稿。1932年当時の住所は、呉市宮原7丁目128。呉高等女学校教員と思われる。【文献】『エッチング』1(1932.11)・22(1934.8)・59(1937.9)(樋口)

長田与三吉(おさだ・よさきち)

守洞春が中心となって発行した飛騨高山の版画誌『版糸』第1号(1938)に《春浅く》を発表。ただし、現存の『版糸』第1号に長田の版画は欠落。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小澤耕一(おざわ・こういち)

豊橋エッチング協会会員。1936年8月豊橋ホテルに西田武雄を招いての座談会に出席。【文献】『エッチング』47・48(1936.9・10)(樋口)

小沢幸雄(おざわ・ゆきお)

長野県松本市西幅上町に生まれる。長野県師範学校第二部1年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹氷』第1号(皇紀2598年版)(1938)に《アルプス》を発表する。1940年同校を卒業。1950年当時は東筑摩郡島内小学校に勤務。【文献】『樹氷』1 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信

州大学教育学部本校 1950)(加治)

押尾宗平(おしお・そうへい) 1918～1996

1918(大正7)年千葉県に生まれる。はじめ画家をめざしていたが、1932年頃、兄の文芸同人誌の製版を手伝ったことをきっかけに謄写版印刷をはじめ、上京。謄写印刷工房経営とともに『文学行路』を出版していた福永剛のもとで技術を学び、佐川義高(草間京平)らの知遇を得る。千葉県で最初の謄写印刷店、千葉謄写堂につとめ、1939年に「平和謄写堂」を開店。1942年謄写印刷研究誌『謄写建設』を創刊、千葉県師範学校で謄写版を教えた。戦後、創作版画について尋ねるために若山八十氏に会い、そのすすめで、1948年、1949年の第16回、第17回日本版画協会展にそれぞれ孔版画《橋》、《樹》を出品した。孔版技術研究を目的として1947年千葉孔版クラブを創立。1996(平成8)年逝去。【文献】『謄写建設』3(溝口謄写印刷所 1943) / 黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947) / 『第16回日本版画協会展目録』 / 『第17回展日本版画協会展目録』 / 『孔星』(千葉県孔版技術者協会 1998)(植野)

押田龍治(おしだ・たつじ)

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された教師対象の木版画講習会(講師:平塚運一)に参加。その記念版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《[無題]》、第2号(1938.1)に《登山》を発表。現在、第2号は所在不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

尾嶋晟憲(おじま・あきのり)

大阪で発行された版画誌『黄楊』創刊号(1933.8)に《花と果物》《安治川風景》を発表。「安治川べりに住んで大分永くなるので安治川風景も大分できた。これもその一つであるが、近頃色刷りにこつてあるので、一色刷はうまくこなせなかった」と感想を寄せている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

織田一磨(おだ・かずま) 1882～1956

1882(明治15)年11月10日東京市芝公園に生まれる。画家の織田東禹は次兄。1894年大阪で石版画工として成功していた東禹をたより、一家で大阪へ移る。1898年東禹から絵の初歩と石版術を学び、この年から関西美術会展や日本水彩画会展など、団体展に水彩画を早速出品しはじめる。1899年には新古美術展覧会に水彩画を出品、一等褒賞を受けた。1902年大阪市役所図案調整所にはいって図案制作に携わる。以来積極的に図案の制作を行った。1903年に東京に戻り、印刷所に通うとともに川村清雄に学び、翌年よりトモエ会展に水彩画を出品した。1907年東京勸業博覧会に水彩画と図案を出品、また第1回文展に水彩画を出品した。1908年1月、前年創刊の『方寸』に自画石版を掲載、以後掲載をつづけ、1909年7月発行の3巻5号より同人となった。その年「パンの会」会員ともなる。1911年再び大阪に移り、大阪帝国新聞社美術部に勤務、また中山太陽堂広告部に勤務して制作する。1914年サラリーマン生活に終止符を打って東京に戻り、自宅で「パピヨン図案社」の仕事をしながらか、二科や日本水彩画会の展覧会などへ水彩画を出品したり、個展を開催したりして本格的に画家として活動しはじめる。1916年『東京風景』(20景)の制作を開始し、翌年完結させた。引きつづき『大阪風景』(20景)を制作。1918

年第1回自画石版個展開催、また日本創作版画協会を結成した。1922年松江に赴き、1925年東京に戻って活動する。1927年、この年から版画の出品が認められた帝展へ出品。1927～30年にかけて、関東大震災から復興した東京の新風景、新風俗などを描いた『画集銀座』（第1輯、2輯）、『画集新宿風景』を制作。この間1929年に、石版画家、銅版画家らで『洋風版画会』を結成した。1931年日本版画協会発足に伴い会員となる。またこの年吉祥寺に住居兼アトリエを移し以後活動の拠点とした。1933年武蔵野雑草会をおこし、しばらく生活の中心となった。1944年文展に『警戒管制の街』をおくったが陳列差し止めとなった。1945年富山県福野町に疎開、1949年東京に戻る。1953年織田石版術研究所を開設して石版を教えた。1956(昭和31)年3月8日逝去。『水彩画法』(1904)、『水彩画帖』(1911)、『浮世絵十八考』(1926)、アルス美術叢書『北斎』(1926)、『浮世絵と挿絵芸術』(1931)、『喰へる雑草』(1943)、『武蔵野の記録』(1944)などの著書がある。北斎の研究者でもあった。【文献】『織田一磨展図録』(町田市立国際版画美術館 2000) (滝沢)

織田観潮(おだ・かんちょう) 1889～1961

1889(明治22)年12月31日東京根岸に生まれる。本名定次。尾竹国観に師事。異画会で受賞を重ね、1915年以降、文展、帝展、新文展に出品。歴史画やかぐや姫などの物語の世界を好んで描く。戦後は再開の日本美術協会展に出品。1961(昭和36)年2月6日逝去。版画は赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921 限定300部)に木版《琵琶と鈴鹿》1図と『大正震災火災木版画集』(画報社 1924)に《秋晴れのバラック》《野毛の山から》など木版6図制作。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) / 『山田書店新収目録』40(2000.12) / 『版画にみる東京風景』図録(大田区立郷土博物館 2002) (樋口)

織田東禹(おだ・とうう) 1873～1933

1873(明治6)年9月20日東京に生まれる。本名、明(さとし)。織田一磨は弟。1889年不同舎同人の宮島鎧八に洋画を師事、翌年には結城正明にペン画を学ぶ。その一方で、オットマン・スモリックの高弟であり、彫刻石版の名手と言われた金子政次郎に師事して石版術を修練した。1895年大阪に移り住み、織田東禹の名で活躍する。1899年第5回新古美術品展で一等褒状を受けた。1903年第5回内国勸業博覧会に出品、翌1904年第1回関西美術会展に《勤勉》を出品して宮内庁買上げとなった。またこの年大阪毎日新聞絵画部記者として日露戦争に従軍、翌1905年に東條鉦太郎、久保田金仙、一條成美らと、その成果を石版画集『出征記念 凱旋みやげ』(修文館)として発表した。この年東京毎日電報社に入社し、東京に移る。1907年東京勸業博覧会に水彩画の大作《コロポックルの村》を出品し、褒状を受けた。1916年第3回院展(洋画部)に出品。1918年第12回文展に出品、翌1919年には第1回帝展に入選した。1920年渡欧し、トレドでエル・グレコの作品に感動する。1921年帰国。1923年第1回大阪市美術協会展に参加し幹事となり、翌1924年第1回大阪市美術協会展に出品した。1932年大坂城天守閣の「豊臣時代の大坂城鳥瞰図」を制作。1933(昭和8)年逝去。【文献】『よみがえる百年前の風景 いま、水彩画への誘い展図録』(星野画廊 2009) (滝沢)

小田富弥(おだ・とみや) 1895～1900?

1895(明治28)年7月5日岡山県に生まれる。本名大西一太郎。小田は母方の姓。1898年大阪に移る。17才の時に北野恒富主宰の白耀社で、中村貞以、樋口富麻呂らと共に日本画を学ぶ。1922～23年頃、知人の紹介で描いた『大阪朝報』の時代物の挿絵が、当時プラトン社で雑誌『苦楽』を編集していた直木三十三(後の三十五)の目に留まり、病気で入院中の岩田専太郎の代役として『苦楽』の仕事を引き受けたのがきっかけで挿絵画家の道を歩む。その後は『週刊朝日』『サンデー毎日』『講談倶楽部』などの雑誌挿絵や『東京朝日』『大阪朝日』『大阪毎日』などの新聞挿絵で活躍した。大阪毎日新聞に連載の林不忘原作『新版大岡政談』(1927.10～1928.5)で描く丹下左膳や子母澤寛『彌太郎笠』の股旅ものスタイルが人気となる。戦後は「一乗寺秀司」のペンネームで大衆小説などに挿絵を描き、1952年講談全集『野狐三次』『お富与三郎』(講談社)が最後の挿絵となった。1990(平成2)年逝去か(没年については確認できず)。版画は、刊年不明だが昭和初期頃(昭和9年頃)と思われる木版画《夕涼み》(白耀社版)、《七月 夕べ》《八月 すきや》(大阪木版社版)などの美人画の制作がある。【文献】『近代日本版画大系』3(毎日新聞社 1976) / 資延勲『小田富弥さしえ画集』(私家版 1994) / 『近代美人版画全集』(阿部出版 2000) / 『山田書店新収美術目録』93(2010夏) (樋口)

織田 博(おだ・ひろし) 1913～1927

1913(大正2)年織田一磨の長男として大阪に生まれる。1925年の『HANGA 児童作品集』(神戸・版画の家)に《お父さんの顔》(木版 or リノカット 図版は1929年9月の『版画 CLUB』第5号にも再録)が収録される。1927(昭和2)年2月の日本創作版画協会第7回展に木版画《お父さんの顔》を出品するも、同年12月15日肺結核により東京で逝去。翌1928年1月の第8回展には遺作の木版画《水仙》《お父さんの顔》《奏楽》《学校の先生》が並び、長谷川木馬は「つい近頃亡くなった、織田一磨氏の息博君の遺作が四五点あつた。『学校の先生』『お父さんの顔』など却々ユーモラスな表はれがあり、此方面にいゝ素質を持つてゐたやうに思はれる。」(「創作版画展を観る」『中央美術』143(1928.3)と評している。【文献】小池智子編『織田一磨年譜(一八八二～一九五六)』(織田一磨展)図録(武蔵野市民文化会館 1989) (三木)

〔おだ〕 広延(おだ・ひろのぶ) 1888～没年不詳

1888(明治21)年に生まれる。戦前作と思われる風景木版画《南総串浜》《京都安川町》《保ヶ谷の雪》(限500)《浜名湖かいづ釣》(限500)をなど制作。作家の詳細は不明。【文献】『The new wave』(Hotei Japanese prints 1993) / 『版画堂』目録103(2014.3) (樋口)

尾竹越堂(おたけ・えつどう) 1868～1931

1868(慶応4)年1月28日越後国白根町(現在の新潟市)に生まれる。本名熊太郎。国雪、国一、国式、観明、越堂とも号す。国石と号して画を描いていた父倉松の影響で、早くから画に親しみ、国雪の号で『絵入り新潟新聞』に挿絵を描く。1890年頃富山に移り、国一没で売薬版画や『富山日報』挿絵、絵馬などの下絵を描き、富山を代表する絵師の一人となる。1899年富山の大火で一家は焼け出されて上京。その後大阪に移り、引札の下絵な

どを描きながら研鑽を積み、1903年大阪での第3回内国勸業博覧会で銅賞。伊藤博文の命名で、以降「越堂」と号す。後に東京に戻り、役者絵、歴史画などの人物画を得意とする。1911年第5回文展出品。1913年尾竹一門を集めて「八華会」を結成。同年第7回文展では大観との確執から一門（越堂・竹坡・国観）落選となるが、翌1914年第8回文展以降も出品を続ける。1931（昭和6）年12月3日逝去。浮世絵師として売薬版画のほか、明治30年代に「国一」（くにかず）名で稲岡奴之助、菊池幽芳、広津柳浪、渡辺霞亭などの木版口絵や『東京名所十二月四季美人』12枚シリーズの制作、更に赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部 1921 限定300部）に木版《吉良上野介の最後》1図などがある。尾竹三兄弟の長兄で、弟に竹坡、国観。『青踏』同人で富本憲吉の妻となる尾竹一枝（紅吉）は娘（長女）。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）／『山田書店新収美術目録』81（2008春）／国際浮世絵学会編『浮世絵大辞典』（東京堂出版 2008）（樋口）

尾竹国一（おたけ・くにかず）→尾竹越堂（おたけ・えつどう）

尾竹国観（おたけ・こっかん） 1880～1945

1880（明治13）年4月21日現在の新潟市に生まれる。本名亀吉。兄に越堂、竹坡。幼少より兄竹坡と同じ笹田雲石に学び、「国坡」の号を受ける。12歳で東京の学齢館が発行する雑誌『小国民』の全国児童画コンクール一等となり、学齢館主人の斡旋で上京、小堀鞆音に入門して歴史画を学ぶ。その後兄越堂の住む富山に戻るが、15歳で富山博覧会三等受賞。16歳で日本美術協会一等賞、翌年も銅牌を受けるなどして再び上京し小堀鞆音に師事。20歳前後から日本絵画協会・日本美術院絵画共進会を舞台に受賞を重ねるが、兄竹坡とともに岡倉天心、横山大観との確執（1908年の国画玉成会事件や1913年の文展落選事件）では竹坡と歩調を共にし、国画会、大同絵画会、八華会など竹坡の関係した美術団体の創立に参加。一方で1909年第3回文展で《油断》が二等賞受賞以降は文展、一時期は離れるが帝展、新文展と官展への出品を続けた。雑誌『キング』『富士』（講談社 1926）の挿絵や絵本『かちかち山』『建国神話』（講談社 1937）など1926年以降描き続けた挿絵、ポスター絵、絵本など風俗世相画に名を残す。版画は赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部 1921 限定300部）に木版《赤穂城中大会議》1図と博文館『文藝倶楽部』に木版口絵などを制作した。門下に織田観潮。1945（昭和20）年5月18日疎開先の福島県田村郡で逝去。【文献】尾竹親『富山の売薬版画と竹坡』『浮世絵芸術』19（日本浮世絵協会 1969.1）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）／山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）／『山田書店新収美術目録』81（2008春）（樋口）

尾竹竹坡（おたけ・ちくは） 1878～1936

1878（明治11）年1月12日新潟県に生まれる。本名、染吉。日本画家の尾竹越堂は兄、国観は弟。4歳で笹田雲石に南画を学び、1895年第4回内国勸業博覧会に出品した。翌年上京し、川端玉章に入門。小堀鞆音、梶田半古にも師事して大和絵を学んだ。日本絵画協会展に出品、受賞して活躍し、1906年安田靉彦、今村紫紅、石井林響らと「大同絵画会」を創立した。これが1907年の文展開設の際に「国画玉成会」となるが、審査員選考をめぐる

て岡倉天心を批判、衝突して退会した。その後文展に出品、受賞を重ねて力量を示した。1913年に越堂と国観とともに「八華会」を設立。その後1915年に衆議院議員に立候補するも落選、このとき多額の負債を背負った。しかし1919年には日本画の前衛グループ「八火社」を創立、この年開催の第1回展に大正生命主義を代表する《月の潤ひ》《太陽の熱》《星の冷へ》の3幅対を出品して気を吐いた。晩年は帝展に出品し、無鑑査となった。版画の仕事として、明治末発行の『文藝倶楽部』（博文館）に、《お花見》や《姉いもと》などの口絵木版が確認できる。また、赤穂義士の事跡をまとめた、賛文と木版多色からなる『義士大観』（義士会出版部 1921）に《圓山大会議》を寄せている。1936年（昭和11）6月2日逝去。【文献】尾竹親『尾竹竹坡伝 その反骨と挫折』（東京出版センター 1968）／山田奈々子『木版口絵総覧—明治・大正期の文学作品を中心として』（文生書院 2005）（滝沢）

尾竹紅吉（おたけ・べによし） 1893～1966

1893（明治26）年3月20日富山市に生まれる。本名一枝。父は日本画家・尾竹越堂。女子美術学校中退。1912年「青踏社」に入社。平塚らいてうの寵愛を受けるが破綻し、青踏社を去って、1914年3月神近市子らと雑誌『番紅花』（さふらん）を発行。1912年の翼画会展で日本画《陶器》が三等の褒状を受け、1915年の六曲一雙の屏風《枇杷の実》が二等賞となる。『番紅花』の装丁がきっかけで富本憲吉と知り合い結婚する。1927年奈良から東京に移り、富本一枝の筆名で『解放』『婦人公論』『婦人文芸』などに評論や随筆を発表。戦後は1946年富本と別れ、山の本書房を創立、『婦人民主新聞』に執筆し、新日本婦人の会結成のために活躍した。1966（昭和41）年9月23日逝去。版画は『青踏』第3巻第1号（1913.1）の表紙絵を彫刻するほか、『番紅花』第3号（1914.5）の表紙絵を富本憲吉と協同で彫摺。【文献】渡辺澄子「解題』『番紅花 合本版』（不二出版 1984）／寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現』『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）／『富本憲吉展』図録（そごう美術館・奈良そごう美術館 2000）／『生誕120年富本憲吉展』図録（京都国立近代美術館 2006）／山本茂雄・講演「憲吉と一枝 運命の出会い」（第78回面白白樺倶楽部開催 2007.11 白樺文学館）（樋口）

落合武子（おちあい・たけこ）

東京の旭正秀が発行した美術雑誌『デッサン』第6輯（1927.3）に《松》を発表。その同じ年の1月には、落合の図案、野村俊彦の彫りと摺りで《たで》を制作し、野村が発行した版画集『版画』創刊号（1927.1）の表紙として発表している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

尾辻ノリ子（おつじ・のりこ）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』（1936～1938）の第2年2輯（1937.7）に《校旗》を発表する。《校旗》には鹿児島県立伊作高等女学校という名称が入っている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

尾中通正（おなか・みちまさ）

台紙に貼られている木版画《ティールーム》は油性インクで刷られている。その台紙にはタイトル、作者名と

共に「ブラック・エンド・ホワイトです。始めてこのような種類の作品に手をつけたので、はなはだ見にくいものです。(中略) 刷りはルーラーを用いて、インキは謄写版用を用いました。前の時には石版用インキをリンシードオイルでうすめて用いました」とコメント(作者言)が謄写版で印刷されている。それらの状況から、版画同人誌から切り離された作品と考えられる。(加治)

小野英一(おの・えいいち) 1906～没年不詳

1906(明治39)年愛知県岡崎市井田町に生まれる。地元の愛知県第二師範学校附属小学校高等科を卒業。家業を継ぐかたわら、近藤孝太郎(1897～1949 岡崎出身)を知り、絵画を学ぶ。その時期は、近藤が関東大震災を機に帰郷し、岡崎市立高等女学校などで美術を教えるようになった1923年の秋以降のことだろう。1925年には附属小学校で一年下級だった村松隆次(1908～1928)、その妹ふさの3人で創作版画誌『版画』(1925.3・5 2冊)を創刊。第1号に木版画《高原》など4点、第2号に木版画《女》など3点を発表。その後、近藤孝太郎の勧めで休刊していた地元の詩歌の同人誌『草原』と合体し、版画と詩歌の同人誌『試作』(1925.6～1926.7 6冊)として再出発。創刊号に《郊外風景》4点と裏表紙絵《つくし》を発表したほか、同人として毎号に木版画を発表している。翌1926年には、札幌の創作版画誌『さとぼろ』にも作品を送り、同誌の第2巻第1号(1926.1)に《夜汽車》、第3巻第2号(1926.10)に《自転車競走》、第3巻第3号(1926.11)に《鶏頭》を発表。また、近藤孝太郎らの主宰する洋画団体「我々の会」にも参加し、第1回展(4.14～20 岡崎市立図書館)に版画《風景》を出品したほか、岡崎で創刊された『志じ満』の創刊号(1926.11)に木版の表紙絵と《鶏頭》を発表している。【文献】『近藤孝太郎とその周囲』図録(岡崎市美術館 1983)／『創作版画誌の系譜』(三木)

小野憲二(おの・けんじ)

短歌雑誌『車前草』(1913)の[木版]表紙絵を制作か(未確認)。【文献】寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005)(樋口)

小野幸吉(おの・こうきち) 1909～1930

1909(明治42)年3月10日山形県酒田市に6人兄弟の三男として生まれる。6歳の頃腎臓病を患い、以来病弱であったという。1921年酒田中学に入学。2学年の頃に美術教師の井口亘を中心に「白楊画会」を起し、同人回覧雑誌『若い芽』を発行。友人から借りた『高間筆子詩画集』や村山槐多、関根正二などに強く影響を受ける。3学年の頃には画に夢中となり、1925年春同校を中退。同年秋上京して、太平洋研究所で高間惣七や上野山清貢等に学ぶ。1928年頃から1930年協会研究所に通い、里見勝蔵、林武等の指導を受けた。1929年に槐樹社展や1930年協会展等に出品。同年秋の第26回二科展に《花》《ランプ》を出品するが、この頃より健康を害し、12月に帝国大学病院へ入院。翌1930(昭和5)年1月8日、20歳10カ月で夭折。酒田中学時代に同期だった佐藤三郎(後に山形新聞社論説委員や本間美術館副館長など務める)の尽力で、遺された詩篇と早逝を悼む高間惣七、里見勝蔵、白井喬二、林武、大野五郎、堀田清治らの追

悼文をまとめた『小野幸吉画集(副題・小野幸吉遺作画集)』(金星堂 1932)が出版された。版画は17歳の頃に1枚の版木の両面に彫刻した自刻木版《裸婦》《自画像》2点が知られており、《裸婦》は『小野幸吉画集』の装丁に、《自画像》は佐藤三郎、佐藤四郎、富樫喜助ら友人たちが発行の版画同人誌『隕石ト花々』第1輯(酒田駅前・北文堂事務所 1933.1)の巻頭に遺作木版として掲載された。【文献】『小野幸吉画集』(小野幸吉画集刊行員会本の會 1987)／『創作版画誌の系譜』(樋口)

小野朱竹(おの・しゅちく) 1880～1959

1880(明治13)年7月2日岡山県小田郡笠岡村笠岡に生まれる。本名は益太郎。最初は「竹桃」の画号を使う。俳号は「鞭下」。日本画家小野竹喬は実弟。日本画家を志し、1900年ころ竹内栖鳳に師事するも、短期間だったようである。その後は俳句と新劇に専念。1906年から1914年にかけて大阪の松瀬青々の主宰する俳諧雑誌『寶船』に俳句を寄せ、1909年には東京の坪内逍遙の自邸内に設置された「文芸協会演劇研究所」の第1期生となり演劇を学び、また、文芸協会が解散した翌年の1914年には、秋田雨雀、宇野浩二、楠山正雄、永瀬義郎、鍋井克之らと「美術劇場」を興すなどの足跡を遺している。また、この年、石井柏亭、小川芋銭、南薫造ら10数名に原画を依頼した木版画の頒布会「版画会」を興したが、頒布作品のなかには自画・自刻・自摺の《夏の海》もあった。その紹介記事(『假面』3-8)には、「強いて俳優で飯を食はうとすれば媚びた心で最良客に接したり、愛嬌の舞台上に登つたりせねばならぬ。処が氏は何処までも純真な努力の後に創造された芸を見物の前に掲げねばならぬので、そこで他の職、子供の時から好きであつた鑿刀を持つて生活のよすがを求めやうとする」と発会の動機が記されている。その後、再び日本画に転じ、1919年の第1回帝展に日本画《長瀨》が初入選。1921年の第3回展まで連続して入選した。また版画も、1922年の日本創作版画協会第4回展には木版画《風景》が初入選している。翌1923年関東大震災に罹災。竹喬を頼り、京都に移るが、この頃から画号に「朱竹」を使い、1924年の国画創作協会第4回展に素描2点が入選。その後、第5回展(1926)に木版画《飛驒三原》、第7回展(1928)に木版画《霜日》が入選した。また、その間、山口久吉の主宰する『HANGA』第7輯(神戸・版画の家 1925.10)に木版画《唐橋》の作品図版、第9・10輯合併号(1926.7)に木版画《飛驒三原》の作品図版がそれぞれ掲載されている。1928年の国画創作協会解散後は、「新樹社」の結成に参加。翌1929年の第1回展に木版画《無題》を出品したが、以後は画壇から離れている。1959(昭和34)年1月10日京都市で逝去。【文献】『国画創作協会の全貌』(光村推古書院 1996)／『創作版画誌の系譜』(三木)

小野新六(おの・しんろく)

大分県師範学校では1934年10月7日図画教室において教員の武藤完一が講師となり、エッチングの講習会が開かれた。在学中の小野も参加し、その時の生徒作品が大分日日新聞に連載され、その内小野を含む3人の作品が西田武雄発行の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第26号(1934.12)に掲載されている。その他の作品としては、絵葉書サイズのエッチング《長春所見[馬車に御者]》がある。【文献】『エッチング』26(加治)

小野忠明 (おの・ただあきら) 1903～1994

1903 (明治 36) 年 1 月 1 日青森県弘前市に生まれる。美術家小野忠弘 (1913～2001) は実弟。弘前工業学校機械科を卒業。在学中に水彩画・油彩画を独習し、弘前の美術団体「北斗社」に参加。1921 年中学校教師となり青森市に移り住み、棟方志功を知り交友。棟方にゴッホの《向日葵》の原色版の複製画を与えた逸話は良く知られている。その後、上京するも 1923 年の関東大震災を契機に帰郷。その後、樺太に渡り、さらに 1929 年頃に朝鮮に渡り、平壤府立博物館に勤務 (正式には 1935 年からのようである) し、高句麗古墳などの発掘調査にあたった。その間、木版画を独習し、同地の崔志元 (?～1939)、崔榮林 (1916～1985) らに版画を教え、自らも 1938 年の国画会第 13 回展に《眠れる蛙》が初入選。入選時の住所は朝鮮平壤府八千代町となっている。以後、戦前は 1944 年の第 19 回展まで連続して出品。作品名は第 16 回 (1941) が《婦人肖像》、第 17 回 (1942) が《玄武門》《七星門》、第 18 回 (1943) が《扶餘落花門》、第 19 回 (1944) が《「伝説の平壤」挿絵》である。また、1940 年崔榮林らと美術団体「珠壺会」(1944 まで活動) を結成。1942 年日本版画協会第 11 回展に《花》2 点を出品。また、平塚運一の主催する『きつつき版画集』の昭和 17 年版 (1942.8) に《ライラック》、昭和 18 年版 (1943) に《カット二種》を発表している。1944 年には日本版画協会会友に推挙され、同年の第 13 回展に《魚族の中 金魚》《魚族の中 鰻》を出品。出品時の住所が青森となっているので、この頃 (4～5 月か) までに帰郷したようである。戦後は、青森市立第一高等学校などの美術教師として勤務するかたわら、1950 年の国画会第 24 回展に出品し、国画奨学賞を受賞。また、1957 年の第 1 回東京国際版画ビエンナーレ展に《逃走》が入選するなどの足跡を残す一方、日本考古学会会員となり、県・市の専門委員として青森県の石器時代遺跡の調査や県文化財の指定調査などを行っている。1994 (平成 6) 年青森で逝去。【文献】『棟方志功・崔榮林展』図録 (青森県立美術館 2007) / 『創作版画誌の系譜』 (三木)

小野忠重 (おの・ただしげ) 1909～1990

1909 (明治 42) 年 1 月 19 日東京に生まれる。1924 年水彩画研究グループ「蒼原会」の最年少メンバーとなる。またこの会に参加していた山口進や、前年刊行の永瀬義郎『版画を作る人へ』によって版画の魅力を教えられる。1926 年築地小劇場通いをはじめる。1927 年早稲田実業学校卒業と同時に伊藤熹朔らによる人形劇団「人形座」の活動に参加する。また、心座や芽生座の活動にも参加し演劇にのめり込む。1929 年左翼劇場公演「全線」や築地小劇場公演「吼える支那」などを見て左翼芸術への関心を高めた。その後第 2 回および第 3 回プロレタリア美術大展覧会に出品し、自らプロレタリア美術運動に参加した。1932 年「版画の大衆化」を標榜して「新版画集団」を結成し第 1 回展を開催するとともに (1936 年までに全 6 回開催、ほかにアンデパンダン展やエノケンとその一座を廻る版画展などさまざまなテーマで展覧会を開催)、機関誌『新版画』を創刊・発行 (1935 年までに全 18 号発行) する。1933 年黒田源次の『西洋の影響をうけたる日本画』を読んで美術史に関心を持った。1936 年新版画集団を解散し、翌 1937 年に「造型版画協会」を設立、活動が途絶える戦後 1955 年までに協会展を全 12 回開催したほか、座談会の開催や出版活動などを行った。1939

年法政大学に入学し国文学を学ぶ。1941 年最初の著書となる『日本の銅版画と石版画』を発行。同時に自宅に出版社「双林社」を設立し、版画史研究と出版活動に打ち込み、同社から自著を多数発行した。1943 年版画奉公会が結成され理事となる。1945 年岡山県津山市に疎開。1946 年上京し、美術出版社に勤め始める。1948 年杉並区阿佐ヶ谷に住む。1954 年に美術出版社を退社し、以後は個展やグループ展の開催、造型版画協会展や新制作派協会展、日本アンデパンダン展などへの出品をおこなう版画家として、そして版画の技法書やさまざまな分野の版画史について著す版画史研究者として活発に活動した。1961 年モスクワ・全ソ連画家同盟会館で開催の第 1 回現代日本の版画展に招かれて訪ソ、帰途にヨーロッパを周遊して帰国した。1990 (平成 2) 年 10 月 17 日逝去。日本の近代版画について著した代表的な著書に岩波新書『版画—近代日本の自画像』(1961)、『近代日本の版画』(三彩社 1971) がある。【文献】『小野忠重全版画』(求龍堂 2005) / 『生誕 100 年 小野忠重展図録』(町田市立国際版画美術館 2009) (滝沢)

小野為郎 (おの・ためろう) 1898～1951

1898 (明治 31) 年 3 月 26 日新潟県村上に生まれる。本名は為吉。漆工芸家として知られるが、最初は木版画も手掛けた。1920 年『みづゑ』に「版画雑感」を投稿。第 182・186・190・192 号 (1920.4・8・12、1921.2) の 4 回に分けて掲載されたほか、同年 8 月に新潟で仲間と第 5 回二葉会洋画展 (17～19 村上中学) を開き、水彩画《海の精》と木版画 (7 点か) を出品。1923 年には『詩と版画』に投稿した木版画《裏浜》の図版が第 2 輯 (1923.3) に掲載された。1927 年のロスアンゼルス国際版画展に《スノーランド》を出品。また、同年の第 8 回帝展に《北越の冬》が初入選。翌 1928 年の第 9 回展にも《越後獅子》が入選した。その後、1930 年の『HANGA』第 15 輯 (1930.3) に《ざくろ》を発表。翌 1931 年の春陽会第 9 回展にも《競馬場》を出品している。1932 年以降は帝展第四部 (美術工芸) に転じ、漆工作品を第 13 回帝展に出品。その後も新文展、日展に出品した。1951 (昭和 26) 年 4 月 16 日新潟県岩船郡村上町で逝去。【文献】『みづゑ』188 / 『日本美術年鑑』昭和 27 年版 (東京文化財研究所 1953) / 『創作版画誌の系譜』 (三木)

小野竹喬 (おの・ちつきょう) 1889～1979

1889 (明治 22) 年 11 月 20 日岡山県小田郡笠岡村 (現在笠岡市) に四男として生まれる。本名英吉。長兄で日本画家・小野朱竹 (本名益太郎、竹桃とも号す) の勧めで日本画家になる決心をして京都に上る。竹内栖鳳塾に通い、「竹橋」の号を受ける。間もなく入塾してきた土田麦僊と親交を結び、麦僊が没するまで行動をともにする。1907 年開設の第 1 回文展から入選をはたす。1909 年開校の京都市立絵画専門学校別科に麦僊と入学、中井宗太郎の指導を受ける。1910 年田中喜作を中心とする美術談話会「黒猫会」(ル・シャ・ノワール) 結成に参加するが、翌年黒猫会展の鑑査をめぐる意見の対立から解散、「仮面」(ル・マスク) の結成に参加。1916 年第 10 回文展に《島二作 早春・冬の丘》を出品し、村上華岳と共に特選を受けるが、翌 1917 年第 11 回文展で二人とも落選となり、文展審査への不信感がつのる。1918 年麦僊、華岳、紫峰、晩花らと「国画創作協会」を結成、「国画創作協会展」(国展) を開催する。国画創作協会第一部 (日本画) は、1928 年

経済的な行き詰まりで第7回展をもって解散し、新たに「新樹社」を設立、麦僊らと賛助会員となる。1923年雅号を「竹喬」と改める。1929年帝展に復帰。その後は帝展、新文展、戦後は日展、新日展への出品を続け、1947年京都市立美術専門学校教授、1958年日展理事常務理事などを務め、1976年文化勲章受章。1979(昭和54)年5月10日京都で逝去。版画の制作は、恩師の中井宗太郎が関わった文芸誌『LE HIBOU』(木兎社 1913.2)に木版挿絵〔他刻〕《桐の実》を制作。また版画家でもあった長兄・小野益太郎(朱竹)が主宰する版画頒布の会「版画会」(1914頃)に協力。『新進花鳥画集』(マリア画房 1931~33)に《茄子》《[花]》の木版2図制作などがある。没後に木版画集『奥の細道句抄絵』(アダチ版画研究所 1981・82 木版10枚 限250)が刊行された。【文献】『美術週報』1-39(美術週報社 1914.8)／『山田書店新収目録』81(2008春)／『創作版画の誕生』図録(渋谷区立松濤美術館 1999)／『生誕120年 小野竹喬展』図録(大阪市立美術館・笠岡市立竹喬美術館・東京国立近代美術館 2009)(樋口)

小野俊男(おの・としお)

慶応義塾普通部3年に在学中、西田武雄発行の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第73号(1938.11)に富士山を描いたエッチング作品を発表。同校では美術部生徒作品展が1938年11月6・7日に開催され、エッチング約100点が展示された(『エッチング』72 1938.10)。この富士山もその中の1枚と考えられる。【文献】『エッチング』72・73(加治)

小野正男(おの・まさお)

生没年不詳。長野県須坂で小林朝治が発行した版画誌『樸』第9輯(1936.4)に《賀状》、第10輯(1936.7)に《岩窟》、第11輯(1936.11)に《藁人形》、第12輯(1937)に《賀状》を発表する。その頃、東京の料治熊太は版画誌を数多く発行しているが、その内の版画集『土俗玩具集』第5~10輯(1935~1936)や『おもちゃ絵集』第1・3~6・9・10輯(1936.3~12)に日本の郷土玩具を題材とした版画を発表。その中の1枚では、料治の娘真弓(当時8歳)の版画の彫師も勤めている。1936~1940年当時、小野は久留米市大石町276(『朱美通信』2)に住所をおいていたが、朝鮮釜山の清永完治によって発行された版画誌『朱美之集』(1940~1942)には第1冊(1940.5)の《中山公園(中支蚌埠)》を始め、第2冊(1940.8)《或る支那街》、第3冊(1940.12)に《大運河(中支丹陽)》、第4冊(1941.9)に《泥娃娃》など、朝鮮の人々の生活や風景などを題材した版画を発表している。著書『久留米玩具誌 第1』(1936)には木版画《鶴千代》が貼付されていて、発行者梅林新一によると小野は医師で無類のおもちゃ好き、本業の傍ら実地調査に各地を奔走し、玩具界に貢献すること甚大であると言葉を寄せている。【文献】『久留米玩具誌 第1』(土俗玩具研究会 1936)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小野益太郎(おの・ますたろう)→小野朱竹(おの・しゅちく)

小野好恵(おの・よしえ)

大分県大野郡の生野正義ら教員仲間は版画誌『大野版画』(1933~1934)を発行。その第2号(1934.2)に

《犬〔賀状〕》を発表する。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小野澤 亘(おのざわ・わたる) 1909~1995

1909(明治42)年東京に生まれる。小学校を卒業後、東京・小石川の共同印刷に働きながら、川端画学校で日本画を学ぶ。1929年に設立された日本プロレタリア美術研究所の第1期夏期講習会に参加。所長の矢部友衛に誘われ、そのまま住み込みで研究所の仕事を手伝う。1930年から1933年の第3回プロレタリア美術大展覧会(第3~5回展)に油絵を出品。その間、争議支援の活動などにも積極的に参加。治安維持法違反で6回検挙されたという。1934年参加していた日本プロレタリア美術家同盟が解散。1937年大田耕士・久米宏一・松下井知郎とともに、西田武雄の日本エッチング研究所に通い、エッチングによる漫画を制作し、漫画四人展(10月 銀座・紀之国屋画廊)を開催。翌1938年には同メンバーで「東京漫画研究所」を開設し、機関誌『カリカレ』(1938.6~1941.6 35冊)を創刊、編集兼発行印刷人となった。1939年中国に渡り、北京に住む。また同年の『エッチング』第78号(1939.4)にエッチング《演劇(築地小劇場)》の図版が掲載されている。1945年の終戦を中国で迎えるが、11月に内戦中の解放区に入り、舞台美術などの仕事につき、1949年の中華人民共和国建国記念式典が行われた天安門の装飾や看板の制作にもたずさわったという。1959年帰国。帰国後は『赤旗』に「さわ・わたる」のペンネームで政治マンガを書いている。1995(平成7)年9月6日逝去。【文献】「小野沢亘さんとあの頃」『美術運動』116(1987.2)／「抵抗の群像 小野沢亘」ブログ『不屈』(中央版 392号 2007.2.15)／大田耕士「漫画誌 絵本・カリカレの青春」『日本古書通信』748(1991.11)(三木)

小野寺敏雄(おのでら・としお)

北海道名寄中学校2年に在学中、西田武雄が発行した日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第75号(1939.1)にエッチング作品を発表。当時同校では松田操が教師をしており、エッチング講習会を開催するなど版画教育に熱心であった。【文献】『エッチング』75(加治)

小島堅証(おばた・けんしょう)

東京の料治熊太が発行した版画誌『白と黒』第31号(1933.1)に《炬辺》を発表。そのほか、同じ料治が発行した版画誌『版芸術』第9号(1932.12)と第〔21〕号(1933.12)に賀状を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小島辰之助(おばた・たつのすけ)

東京吉祥寺の朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《雪の井之頭》を発表。【文献】『むさしの風景』1(加治)

小圃千浦(おばた・ちうら) 1885~1975

1885(明治18)年12月18日岡山県後月郡井原町(現井原市)に8人兄弟の末子として生まれる。本名佐藤蔵六。5歳で仙台に住む次兄で日本画家・美術教師の小圃六一(本名佐藤立二、後に小圃キチと結婚し小圃姓となる)の養子となる。14歳で上京し、土佐派の頼田丹楼に師事。17歳で日本美術院正会員になるが、18歳で単身

渡米。サンフランシスコで『新世界』『日米新聞』などの日系新聞の挿絵や舞台美術などで生計を立てる。1922年日比松三郎らと「サンフランシスコ東西藝術協会」を設立。1927年ヨセミテ溪谷と出会い、そのスケッチ風景が賞賛されてカリフォルニア大学バークレー校の美術部教授に迎えられる。1941年日米開戦にともない、西海岸に居住の日系人たちは、1942年4月タンフォラン収容所に強制的に収容されるが、収容所内にミネ大久保、日比松三郎らと「タンフォラン美術教室」を開設し、幼児から大人まで600人もの人たちが受講したという。その後9月にはトパーズ収容所に移り、そこでも「トパーズ美術学校」を開校する。1943年解放され、1945年バークレー校に復職、名誉教授に。1948年退職。1975(昭和50)年10月6日バークレーで逝去した。最初の版画は、渡米前の1902年頃、仙台『河北新報』連載の「源平盛衰記」に木版挿絵を制作。1927年頃から木版画への関心を深め、1928年養父六一の急逝で一時帰国の折、高見澤木版社から『World Landscape Series "America"』と題するハイ・シエラ(シエラネバダ山脈)とカリフォルニア各地の風景、歌手タニア・サバニーバの肖像《歌はんとする前》を含む35点の木版画集(限定100部)を制作、完成まで1年半を要した。この版画集制作のために、仙台の家屋敷や小圃家伝来の小作地を売り払い、更に日本での個展の売り上げをつぎ込んで支払切れず、帰国後もその返済に苦しんだといわれている。なお、千浦には3人の子どもがおり、長男・希美雄は、パドワイザービールのデザインを手掛け、商業デザイナーとして活躍した。【文献】『アメリカに生きた日系人画家たち』図録(東京都庭園美術館 1995) / 『木版画の近代』図録(長野県信濃美術館 1999) / 下嶋哲朗『サムライとカリフォルニア—異境の日本画家 小圃千浦』(小学館 2000) / 『日本の版画 IV 1931—1940』図録(千葉市美術館 2004)(樋口)

小畑 稔(おばた・みのる)

1922(大正11)年の日本創作版画協会第4回展に木版画《吾妻橋》を初出品。出品時は東京に住む。以後、1928年の第8回展まで連続して出品。作品名は、第5回展(1923)が《静物》《夕べ》《小さきいとこ》、第6回展(1924)が《玉乗り》、第7回展(1927)が《少女》《廟ノ一隅》《裏街》、第8回展(1928)が《花》である。1931年の日本版画協会結成後も、同年の第1回展に《静物》、翌1932年の第2回展に《火の見櫓のある風景》を出品した。なお、1925年に東京美術学校西洋画科を卒業した「小畑稔」と同一人であるならば、福岡県出身で、1920年に予備科に入学。1972年頃はブラジルに住んでいる。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科』(同窓会名簿編集委員会 1972) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)(三木)

OBAHNA KUNYI(おばな・くに)

大阪の堺で発行された『羊土』(1931~1933)は大判の迫力ある版画誌である。その第2号(1932.12)に《五月の池畔風景》《白猫》を発表。「作者の言葉」として両作品に詩を付している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小原育雄(おはら・いくお) 1905~1987

1905(明治38)年、現在の仙台市福田町に生まれる。1918年東北学院中学部入学。卒業後の1923年には宮城郡高砂尋常小学校に勤務。1924年川端画学校洋画部に、1927年文化学院美術科に入学。卒業後は幼児の美術教育に従事。1940年からは石巻市門脇小学校、戦後は門脇中学校、東北大学教育学部付属小学校校工専科に勤務。1962年退職し、仙台YMCAなどの美術講師を歴任。この間、洋画を描き、1929~31年には二科展に入選。文化学院で教師を勤めていた有島生馬や石井柏亭らが一水会を結成すると、その第1回展(1937)に油彩画を出品するが、その後作品の発表は個展中心となる。版画との関わりについては、1933年4月から文化学院専修科は石版や肖像画等の講習を始めるが、エッチング講習は10月に第1回を、第2回は11月に各1週間、エッチング研究所の西田武雄を招いて開催した。学院在学中の小原も講習会に参加し、その時制作した作品を西田主宰の『エッチング』第12号(1933.10)と第14号(1933.12)に発表。第14号の《[裸体]》について、西田は「小原君の裸体軽いもの、エッチングの技法を覚へ様とするのだったらもっと手のこんだものにぶつかって行くこと。失敗をおそれちあうまくならない」と言葉を寄せている。1987(昭和62)年逝去。没後に作品集が刊行される。【文献】『エッチング』12・14 / 『小原育雄作品集』(小原せつ 1989)(加治)

小原 憲(おはら・けん)

1924(大正13)年創作版画雑誌『詩と版画』に木版画《風景》を投稿。第5輯(1924.6)に、「以前見たものよりは非常に進んだと思ふ。惜しいことに摺りが悪くて凸版にはよく出ない」という平塚運一の評と共に図版が掲載された。その後、同年10月に京都で開かれた詩と版画社第1回展に《風景A》《風景B》を出品。続いて第8輯(1924.11)に出品作の《風景》の図版が、「K[栗田雄] 深澤[索一] 君のを見たあとだと一寸違つた気持ちがしますね。F[藤森静雄] 此の人はいゝ素質を持つて居ると思暇すね。I[石井鶴三] だがまだ未成品でせうね。(一同賛成する)」との評と共に掲載されている。また、公募展は、1927年の日本創作版画協会第7回展に木版画《残雪》《切川村風景》《荒島村風景》が初入選。出品時は島根県に住む。翌1928年と1929年は、日本創作版画協会のほか春陽会にも出品し、日本創作版画協会第8回展に《鶏頭》《新木迎ひ》、第9回展に《曲芸》、春陽会第6回展に《軽業》、第7回展に《百日草》がそれぞれ入選している。なお、《新木迎ひ》の図版は『HANGA』第14輯(1928.11)に作者言とともに掲載された。また、1930年の『HANGA』第16輯(1930.4)には《花と女》を発表している。【文献】『詩と版画』5・8(1924.6・11) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

小原古邨(おはら・こそん) 1877~1945

1877(明治10)年2月9日加賀金沢に生まれる。本名又雄。上京して鈴木華邨に学ぶ。その関係で師の一字を受け「古邨」の雅号がある。1935年の渡邊版画店渡邊庄三郎編の『木版画目録』によれば「東京美術学校教授(初め東京帝国大学教師)及び帝室博物館の顧問たりし米国人のフェノロサ博士の指導を受けて、米国へ送る花鳥画を多数描く、古邨と云ふ画名にて両国の大平より

依頼の花鳥版下を描き、大正元年より祥邨と改め肉筆のみ揮毫せしが、昭和元年より渡邊版画店の爲に、主として君得意の花鳥版下の創作に努力しつつあり。昔時の浮世絵師に専門的花鳥画家は無く、優秀作は少ない。君の描画は草花、鳥魚獣等は悉く熱心なる写生に基づき、更に美化したるもの故、室内の装飾品には永く保ち好適の木版画です」とし、「古邨」名の版画が両国の版元松木平吉（大平）から出ていること、「祥邨」は1912（大正元）年からと判る。この渡邊目録に掲載の祥邨版画は118点（大判・特大判・大形色紙を含む）を数える。なお、「豊邨」（ほうそん）も別号の一つとされる。1945（昭和20）年逝去（月日未詳）。【文献】『Crows, Cranes & Camellias the natural world of Ohara Koson 1877 - 1945』（Hotei Publishing, Leiden 2001）／秋田真波「古邨のプロフィール」『版画芸術』135（阿部出版 2007.3）（岩切）

小原祥邨（おはら・しょうそん）→小原古邨（おはら・こそん）

小原豊邨（おはら・ほうそん）→小原古邨（おはら・こそん）

小谷内栄二（おやない・えいじ）1907～没年不詳

1907（明治40）年東京に生まれる。1931年の日本版画協会展第1回展に木版画《名古屋城》《小鈴谷風景》《店》の3点が初入選。翌1932年に日本版画協会会員となり、同年の第2回展に《裏道》《汽車の中》《部屋の裏》《晴れた日》の4点、1933年の第3回展に旧作の《海辺》と新作の《風景》《人物》の計3点、1934年のパリで開かれた「日本現代版画とその源流展」に《海辺》、1935年の第4回展に《協会》《工場》《川べり》《城》《庭師》の5点、1936年から翌1937年にかけて欧米9都市を巡回した日本現代版画展に《川べり》（リヨン展・ベルリン展の目録のみ確認）をそれぞれ出品した。また、1932年の第7回国画展にも木版画《仕事場》を出品しているが、出品時の住所は名古屋市東区石園町1丁目であった。1936年以降は公募展への出品はなく、日本版画協会も1939年9月までは所属していたことが確認できるが、その後自然退会したようである。【文献】『日本版画協会展目録』／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所2006）（三木）

尾山 清（おやま・きよし）

朝鮮釜山に在住の清永完治によって発行された版画誌『朱美之集』の第1冊（1940.5）に《ガードから見た風景》、第2冊（1940.8）に《瑞鳳（題箋）》《踏切のある風景》、第3冊（1940.12）に《蔵票（自家用）》、第4冊（1941.9）に《艶子の像》、第5冊終刊号（1942.8）に《郊外の停車場》を発表。それ以前に佐藤米次郎の発行した『趣味の蔵書票』第5号（1940.12）に蔵書票を発表。1940（昭和15）年当時、京城府並木町151（『朱美通信』2）に在住。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

尾山直樹（おやま・なおき）

1937年当時、東京美術学校日本画科3年生。高田（浜田）知明、遠藤健雄らと共に版画教室エッチング部に所属。【文献】『エッチング』57（1937.7）（樋口）

恩地孝四郎（おんち・こうしろう）1891～1955

わが国の近・現代を代表する版画家である。戦前の創

作版画運動をリードし、絵画としての「版画」を確立させ、創作版画から現代版画への橋渡しをしたことはよく知られている。また、『月映』の時代から晩年まで一貫して抽象表現を追い求め、日本の抽象絵画の先駆者としても高い評価を受けている。版画の他にも、油絵、写真、舞台芸術、詩作などと、その活動の領域は多方面にわたり、特に本の装幀では一家をなしたが、ここでは版画家としての足跡に絞り略述する。

1891（明治24）年7月2日東京府南豊島郡淀橋町元柏木村に生まれる。1909年独逸学協会学校中学を卒業。竹久夢二の『夢二画集 春の巻』（洛陽堂 1909）を読み、その読後感を送ったことから交友が始まり、多くの感化を受ける。1910年東京美術学校予備科西洋画科志望に入学。その後、彫刻科、西洋画科と転科し、1915年退学。在学中の1912年に田中恭吉を知り交友。1914年田中の影響で版画を始め、田中・藤森静雄と自画・自刻・自摺の木版画集『月映』（私輯版 1914.4～7 6冊）をまとめ、続いて詩歌と版画の同人誌『月映』（洛陽堂 1914.9～1915.11 7冊）を刊行。第5号（1915.3）に発表された木版画《抒情 『あかるい時』》は、初期版画の代表作であり、日本近代における最初の抽象表現として位置づけられている。1915年藤森らと田中恭吉遺作展（10.23逝去 23歳 12.3～15 1日比谷美術館）を開催。1916年室生犀星・萩原朔太郎らの同人誌『感情』（1916.6～1919.11 32冊）に参加。装幀を担当し、第2号より版画、詩などを発表。第20号（1918.6）は「恩地孝四郎抒情画集」の特集であった。1917年萩原の第1詩集『月に吠える』（感情詩社・白日社出版部）の装幀を担当。もともと田中が依頼されていたものであるが、その遺志を継ぎ、田中と自作の版画・素描を挿絵に用いている。1918年山本鼎・織田一磨らの「日本創作版画協会」の結成に協力し、翌年の第1回に《画集『幸福』より》など10点を出品。会員に推挙され、1929年の第9回展まで毎回出品。その間、創作版画が初めて受理された1927年の第8回帝展に《幼女浴後》が入選。第9回展（1928）に《紅色の靴》、第10回展（1929）に《岩間》を出品するも、第11回展（1930）に出品した《双貌》が落選し、以後の応募をやめている。1931年に創作版画家の作家たちが大同団結した「日本版画協会」の結成に参画。常務委員・幹事を務め、第1回展に《「青い猿」さし糸（単行本）》を出品。以後、第11回展（1942）を除き、1944年の第13回展まで毎回出品し、中心的会員として活躍。1934年には『飛行官能』（版画荘）を出版。自作の詩と版画、北原鐵雄の写真を組み合わせるといって、新しい形式の表現を試みている。1936年平塚運一の誘いで国画会に招かれ、第11回展に《人形のある室内》《廟門》を出品。版画部の会員に推挙され、以後、戦前は第19回展（1944）まで出品し、同会でも活躍した。その間、1943年の第18回国画会と第12回日本版画協会展に出品した《「水島」の著者（萩原朔太郎像）》は、戦前のわが国の具象版画の頂点を示すものであった。1938年からは再び官展に出品を始め、第2回新文展に《丘腹の稚牛》を無鑑査出品。以後、1944年の文部省戦時特別美術展まで出品を続けた。また、1939年からは、自宅（府下杉並町東荻）で版画の研究会「一木会」を主宰し、後進を指導。戦前は関野準一郎、山口源、加藤太郎、杉原正巳、守洞春、若山八十氏らが参加した。1943年には日本版画協会・日本エッチング作家協会・造型版画協会・新版画会・無所属版画家が結集し、「日本版画奉公会」が結成され理事長に押された。戦後は、

戦災に罹災した会員が多いために自宅を日本版画協会の事務所とし（1954 まで）、その再建に尽くし、1946 年の第 14 回展を開催。また、国画会の再開展となった第 20 回展（1946）にも出品。以後、両展を中心に、1951 年の第 1 回サンパウロ・ビエンナーレ展、1952 年の第 2 回ルガノ国際版画展などの海外展にも出品。抽象版画に専心し、紐・板切れ・針金・靴の踵・落ち葉など日常周辺の素材を版に用いた実験的な「実材版画」（マルチブロック・プリント）を精力的に発表した。また、1946 年から「一木会」を再開したが、戦前のメンバーに加え、稲垣知雄、北岡文雄、駒井哲郎、斎藤清らが新たに参加している。1949 年には日本美術家連盟理事、1953 年には国際版画協会理事長などを歴任し、1955（昭和 30）年 6 月 3 日東京都で逝去。版画の普及・地位向上に指導的役割を果たした生涯であった。葬儀は日本版画協会葬として執行され、翌 1956 年の第 30 回国画会展、第 24 回日本版画協会展で遺作の特別陳列があったが、特に日本版画協会展では、『月映』時代の作品から最晩年の《オブジェ No. 3》（1955）など 152 点を展示し、改めてその功績を讃えた。【文献】『恩地孝四郎版画集』（形象社 1975）／恩地邦郎編『新装普及版 恩地孝四郎 装本の業』（三省堂 2011）／桑原規子『恩地孝四郎研究 版画のモダニズム』（せりか書房 2012）／『恩地孝四郎色と形の詩人』展図録（横浜美術館・宮城県美術館・和歌山県立美術館 1994）（三木）